IRIKIFUDOUSONHIGASHI SITE

威力不動尊東遺跡

―― 平成９年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

１９９８年3月

茅野市教育委員会

IRIKIFUDOUSONHIGASHI SITE

威力不動尊東遺跡

―― 平成９年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

１９９８年３月

茅野市教育委員会

序　　文

威力不動尊東遺跡は、このたび、県営圃場整備事業古田地区の実施に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が行ったものです。

古田地区の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成６年度より行われ、数多くの成果がありました。

当遺跡は、平成８・９年度に発掘を行いました師岡平遺跡の一部と考えられ、縄文時代中期初頭の集落の師岡平遺跡より続く部分と、小規模な縄文時代前期末葉から中期後半の集落址と考えられます。集落址のほかに、縄文時代と考えられる落し穴も検出されており、平成７年度に発掘調査を行った久保御堂遺跡と前述の師岡平遺跡の落し穴との関連性も注目される遺跡であります。

また、威力不動尊に引いたと考えられる近代の溝址も検出され、上古田村の近代の信仰を知る上で、貴重な資料であると考えられます。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力また、発掘調査に係わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、また、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成10年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　徹郎

例　　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長小林俊規と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成９年度県営圃場整備事業古田地区に伴う、長野県茅野市豊平威力不動尊東遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成９年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節４として記載してある。

3．発掘調査は平成９年６月12日から10月６日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成10年３月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担は第Ⅰ章第２節３に記してある。また、執筆分担は、第Ⅱ章第２節・第Ⅲ章を河西が執筆し、それ以外を柳川が担当した。

5．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

6．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵・保管されている。

目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会 教育長　両角徹郎

例　　言

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1

　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1

　第２節　調査の方法と経過……1

第Ⅱ章　遺跡の概観……4

　第１節　遺跡周辺の環境……4

　第２節　遺跡の基本層序……7

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物……8

　第１節　縄文時代の遺構……8

　第２節　近代の遺構……22

第Ⅳ章　結　語……24

図版

抄録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第1節　発掘調査に至るまでの経過

平成8年12月18日　8教文第83-1号「平成9年度文化財関係補助事業計画書」を提出し、2,000㎡を県営圃場整備事業古田地区に伴い緊急発掘調査を行うことになった。

平成9年3月12日　8諏地土第15-20号「埋蔵文化財発掘の通知について（第57条の3第1項）」が長野県諏訪地方事務所長小林俊規より文化庁長官へ提出される。

平成9年3月12日　8教文第120-8号「威力不動尊東遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知（第98条の2第1項）」を茅野市教育委員会教育長両角徹郎より長野県教育委員会文化課長へ提出する。

平成9年4月10日　9教文第7-2-1号「農業基盤整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）」で長野県教育委員会より通知され、事業費8,000,000円（農政側負担7,040,000円・文化財保護側負担960,000円）で発掘調査を行うことになった。

平成9年4月15日　「県営圃場整備事業古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」により長野県地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を34,232,000円（うち威力不動尊東遺跡は7,040,000円）で締結。

平成9年5月28日　9教文第21-4号「平成9年度国宝重要文化財等保存整備費及び史跡等購入費補助金交付の申請について」

平成9年7月3日　9教文第1-16号「国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書（通知）」が長野県教育委員会教育長から通知された。

平成9年7月3日　9教文第31-4号「平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出」

平成9年7月14日　長野県教育委員会教育長指令9教文第2-12号「平成9年度文化財保護事業補助事業の交付決定について（通知）」

平成9年7月14日　9教文第2号「平成9年度文化財保護事業補助事業の交付決定について（通知）」

平成9年11月25日　9教文86-2号「文化財保護事業計画変更承認申請書」を提出。

平成10年2月2日　9教文第7-2-1号「農業基盤整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）」が長野県教育委員会教育長より通知され、事業費5,391,000円（農政側負担4,744,000円・文化財保護側負担647,000円）に変更することになった。

平成10年2月4日　9諏地土第8-5号「埋蔵文化財発掘調査業務変更委託契約書」により、諏訪地方事務所と変更契約を行う。

第2節　調査の方法と経過

1.調査区の設定

最初に表面採取を行い遺物の採取できる範囲によって遺跡範囲を設定した。威力不動尊東遺跡は約9,800㎡である。その後、工事該当部分の表土除去を行った。この結果、本調査面積は980㎡となった。これは威力不動尊東遺跡全体の1/10にあたる。

グリッドについては、調査範囲内に設定し、遺構の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x＝205.125、y＝-26684.730を基準点とし、この基準点から一辺4mのグリッドを設定した。

ベンチマークは940.247mを設定した。

2.発掘調査の経過

平成7年12月に師岡平遺跡の範囲確認調査時にあわせて本遺跡の表面採取を行い、遺跡の範囲を定める。

平成9年6月12日より、圃場整備事業のアスファルト除去作業と同時に表土剝ぎを重機により行う。この結果、住居址や落し穴などの遺構が検出され、遺跡は威力不動尊のすぐわきにまで広がっていることがわかった。航空測量は8月12日に行った。発掘調査が終了したのは10月6日である。

3.調査日誌(抄)

6月12日　発掘該当区の道路のアスファルト除去作業を行う。

6月13日　アスファルト下の砂利の除去を行う。砂利を除去するとすぐ下から遺構が検出される。

6月14日　砂利の除去作業。

6月19日　遺構確認を始める。

6月25日　長野県埋蔵文化財センター上田事務所調査課長の広瀬昭弘氏来跡。

7月1日　土坑半截及び土層観察を行う。

7月4日　第2号住居址の発掘を始める。

7月7日　第1号溝址の発掘を始める。

7月16日　第1号住居址の発掘を始める。

7月17日　雨天中止。

7月18日　遺構の半截及び土層観察を行う。

7月22日　遺構の写真撮影を行う。

7月30日　第3号住居址の発掘を始める。

8月6日　長野日報社より第1号溝址についての取材が来る。

8月7日　遺構の半截及び土層観察及び写真撮影を行う。

8月8日　遺構全体図をとる。

8月11日　空中写真測量の準備。

8月12日　空中写真測量を行う。長野県埋蔵文化財センター調査部長小林秀夫氏・上田調査事務所調査部長臼田武正氏・広瀬昭弘氏来跡。

8月18日　1号溝址の石をはずし、図面をとり終える。

8月20日　最終確認を行いひとまず現場を終える。

10月6日　周辺調査を行い調査終了。

4.調査組織

調査主体者　両角徹郎(教育長)

事務局　宮下安雄(教育次長)

文化財課　矢嶋秀一(課長)　鵜飼幸雄(係長)　守矢昌文　小林深志　大谷勝己　小池岳史
功刀　司　百瀬一郎　小林健治　柳川英司(調査担当・報告書作成)　大月三千代
河西克造(長野県埋蔵文化財センター派遣職員・調査担当・報告書作成)

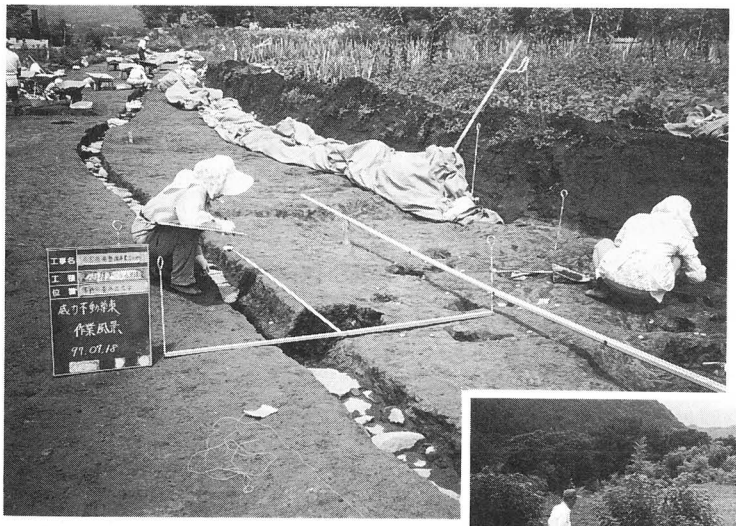
調査補助員　武居八千代　岡　和宣　牛山矩子

発掘調査・整理作業協力者
鵜飼澄雄　太田和美　太田富希子　大宮　文　小尾勝一　河西保明　河西泰人　北原きよゑ

小平　寛　小平三行　小平義市　田中達朗　長田智子　永由照幸　林　靖之　原ちよ子
藤森あさ子　北條嘉久男　目黒恵子　守矢ハツシ　柳沢九五子　柳平年子　吉田勝太郎
吉田キヨコ

基準点測量：株式会社　両角測量

遺構測量委託：株式会社　東京航業研究所



▲実測風景

▲尖石考古館小中学生縄文教室

▲発掘風景

◀発掘に携わった方々

第II章　遺跡の概観

第１節　遺跡周辺の環境

威力不動尊東遺跡（210）は茅野市豊平8308番地他に位置する。遺跡のある尾根状台地の南西側には上古田区が、東側には大日影区がある。上古田区はＪＲ中央本線茅野駅から約4.5kmのところに位置している。

本遺跡は八ヶ岳の火山活動によってつくられた山麓斜面が小河川の浸食によって創り出された小規模な尾根状台地に位置している。遺跡の周辺にはこのような手状にのびる小規模な尾根状台地が広がっており、近隣の師岡平遺跡（78）・上の平遺跡（166）・久保御堂遺跡（313）も同様な地形に立地している。威力不動尊東遺跡は、こうした尾根状台地の背中の部分に展開している小規模な集落であったと考えられる。

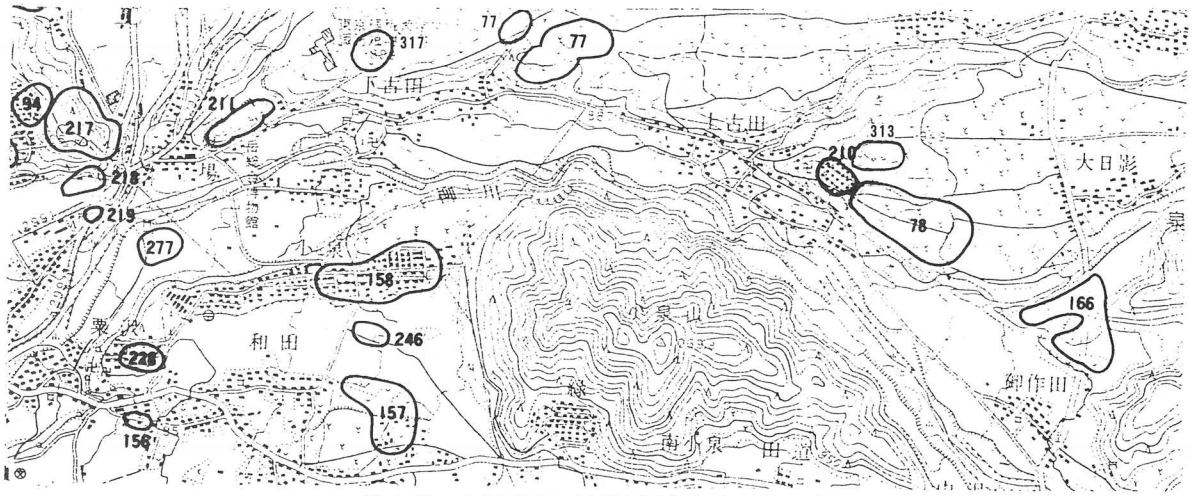
遺跡の南西側には小泉山が、東側には大泉山がありこの二つの山に挟まれた形で遺跡が立地している。遺跡の北東方向を見ると蓼科山が、南側には南アルプスが、西側には茅野市街地が鬼場の城山の張り出しと小泉山の間から見える。この張り出しが鬼場城（217）である。

周辺の遺跡は前述の通りであるが、上の平遺跡は昭和22年に農道改修作業に伴い、昭和62年には住宅建設に伴い、また平成６年には県営圃場整備事業によって発掘された。上の平遺跡は縄文中期中葉の住居址が７軒と落し穴１基、平安時代の住居址２軒が検出されている。

久保御堂遺跡は平成７年度に、師岡平遺跡は平成８・９年度に県営圃場整備事業によって発掘された。久保御堂遺跡は、本遺跡の谷を挟んだすぐ北側の尾根状台地上にある遺跡で、縄文時代の落し穴17基・土坑14基・平安時代の竪穴住居址５軒が検出されている。落し穴は久保御堂遺跡と共通する部分が多く師岡平遺跡の落し穴とともに、広い範囲で狩猟が行われていたことがわかる。

師岡平遺跡は、現在整理作業中のため詳細を明らかにできないが、威力不動尊東・久保御堂遺跡に共通する落し穴と土坑が多数検出されており、落し穴の中心的な遺跡であると考えられる。また、縄文前期末葉から後期前半までの大集落が確認されており、威力不動尊東遺跡の中期後半の住居址との関連性が考えられる。

威力不動尊東遺跡の縄文前期末葉から中期初頭の集落の中心は師岡平遺跡からつながっており、中心は師岡平遺跡であると考えられる。近代の遺構と推察できる第１号溝址は師岡平遺跡の一本松の辺りから出ているので、本来威力不動尊東遺跡は師岡平遺跡の一部と考えられる。



第１図　威力不動尊東遺跡位置図（1/25,000）

第２図　威力不動尊東遺跡周辺の地形（1/2,000）

第3図　威力不動尊東遺跡遺構分布図（1/800）

第２節　遺跡の基本層序

１.土層の堆積状況

本遺跡は、師岡平遺跡の西側に隣接し台地の先端に位置する。この台地は、八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫と上層部の新期ローム層等を基盤としており、この上部に有機物腐食物の堆積である黒色土が堆積し、台地全体を形成している。この台地は、北八ヶ岳西麓の地形区分によると第Ⅳ段丘面（低段丘面）で、段丘は河床から数ｍの比高があり、厚さ２ｍ前後の礫層をのせている浸食段丘である。なお、西側から入り込む谷部を隔てて北方に立地する久保御堂遺跡は、第Ⅰ・Ⅱ段丘面に当たる(1)。

調査区は耕作による撹乱がいたる部分にわたっており、特に調査区中央の２号住居址付近では地表面下約70cmまで畑の耕作が及んでおり、検出面で耕作痕が確認された部分もあった。２号住居址は、覆土が10～15cmの残存しかなく、覆土上部の耕作土から縄文土器片が確認された。また、58号土坑では覆土最上層の焼土層が耕作により巻き上げられた状況が確認されている。一方、調査区東端の１号住居址付近ではローム層上部に黒褐色土の残存が確認されている。したがって、調査区南東隅から中央付近の範囲でプライマリーな土層堆積が確認された一方、中央部から西側にかけては耕作により遺構の上部がかなり削平を受けている状況が見られる。

以下は、１号住居址付近の土層堆積状況である。

Ⅰ層　耕作土　　全体的に締まりがなく、植物の根が入り込む。現在の畑の耕作土。

Ⅱ層　黒褐色土　　１mm以下のローム粒が含有し、Ⅰ層と比べて硬質な土。締まりをもつ。縄文時代の包含層。

Ⅲ層　暗黄褐色土　２～３mmのローム粒が多量含有し、締まりをもち粘性を有する土。ローム漸移層。

２.土層の成因

Ⅰ層は畑の耕作土である。２号住居址付近では大型農耕機械によりかなり深くまで耕作が及んでいたことが認められている。

Ⅱ層の黒褐色土は、師岡平遺跡（７区）の西端で焼土址と縄文土器片が確認された縄文時代の包含層に相当すると思われる。この層は、師岡平遺跡ではある程度の厚さをもつ黒色土を示している反面、本遺跡では土層の堆積状況は安定的ではない。

Ⅲ層の暗黄褐色土は、Ⅱ層堆積範囲で比較的残存状況が良好である。しかし、調査区中央から西側にかけては傾斜が著しく耕作土直下にハードロームの基盤が露出していた。

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構

１.竪穴住居址

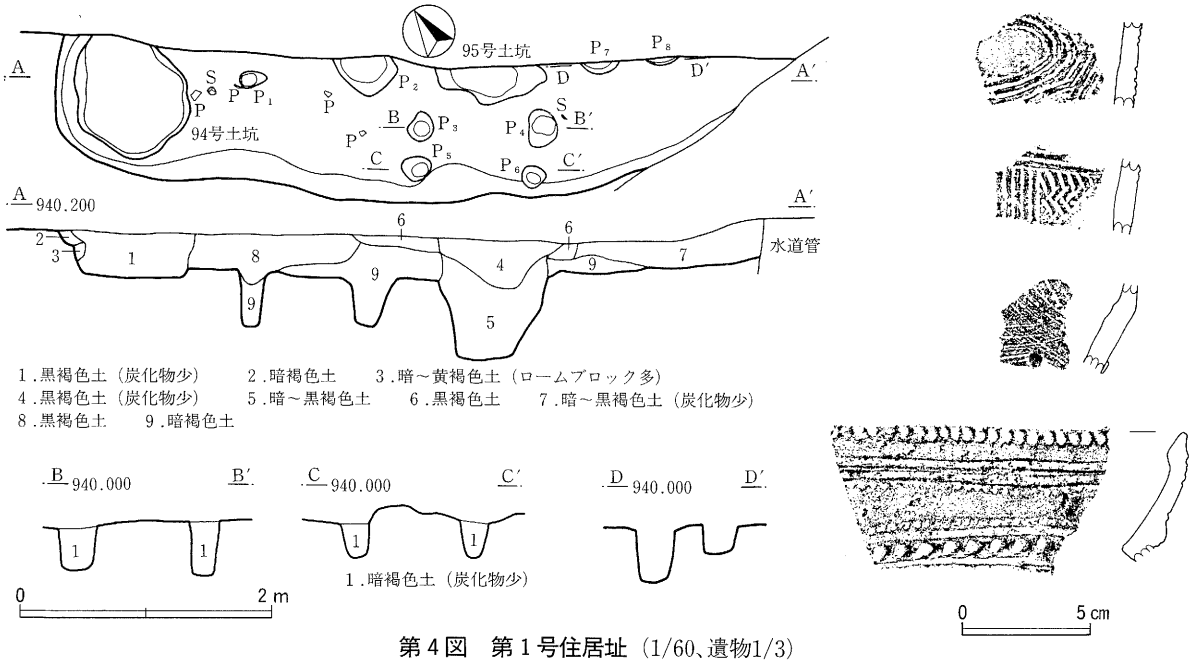
縄文時代の住居址は３軒確認されており、中期初頭に帰属すると考えられる。３軒とも住居址の一部または大半が調査区外へ広がっており、さらに覆土に耕作等の撹乱が及んでおり、遺存状況は比較的悪い。

第１号住居址（第４図・図版７・８）

検出状況　本址は調査区の東側、A17グリッドで確認された。住居址は、師岡平遺跡と接する本遺跡の東端に位置し、３号住居址とは約４ｍの間隔をもち隣接する。住居址は、その大半が北東側の調査区外にのびており、南東側の一角が調査できたにすぎない。住居址内の北側と中央部には、94・95号土坑と重複関係がある。なお、住居址南端は水道管敷設のために破壊されている。

遺構の構造　住居址の全容を把握できなかったため、平面プランは不明な部分が多い。調査した部分から、形状は楕円形で南東～北西方向に長軸をもつ住居址であったと推定される。壁の立ち上がりは、水道管で破壊された南側を除き明瞭で、ほぼ直線状に立ち上がる。最も遺存している南西側で約27cmを測る。床面では８基のピットが確認されたが、主柱穴の配置を明確に把握することはできなかった。確認されたピットのなかで、P_3が34cm、P_4が42cmの深さがあり、柱穴と思われる。壁際では、小孔（P_5・P_6）が検出され、これらのピットはP_5とP_6、P_7とP_8が90～100cmの間隔で対をなしている。床は直接ローム面を使用している。床面は全体的に軟弱で小さな凹凸を呈し、壁際から住居中央にかけて緩やかに傾斜する傾向がある。炉は、調査区外に存在していると推定される。覆土は４層に分層された。床面上には２～５㎜大のローム粒子を含有する暗褐色土（９層）が堆積する。この上面に北側に黒褐色土（８層）、南側に暗～黒褐色土（７層）が堆積し、中央部の浅い凹みに黒褐色土（６層）が堆積する。

遺物の出土状況　遺物は８層下部と９層から、縄文前期末～中期初頭の土器、黒耀石の剥片が出土した。



第４図　第１号住居址（1/60、遺物1/3）

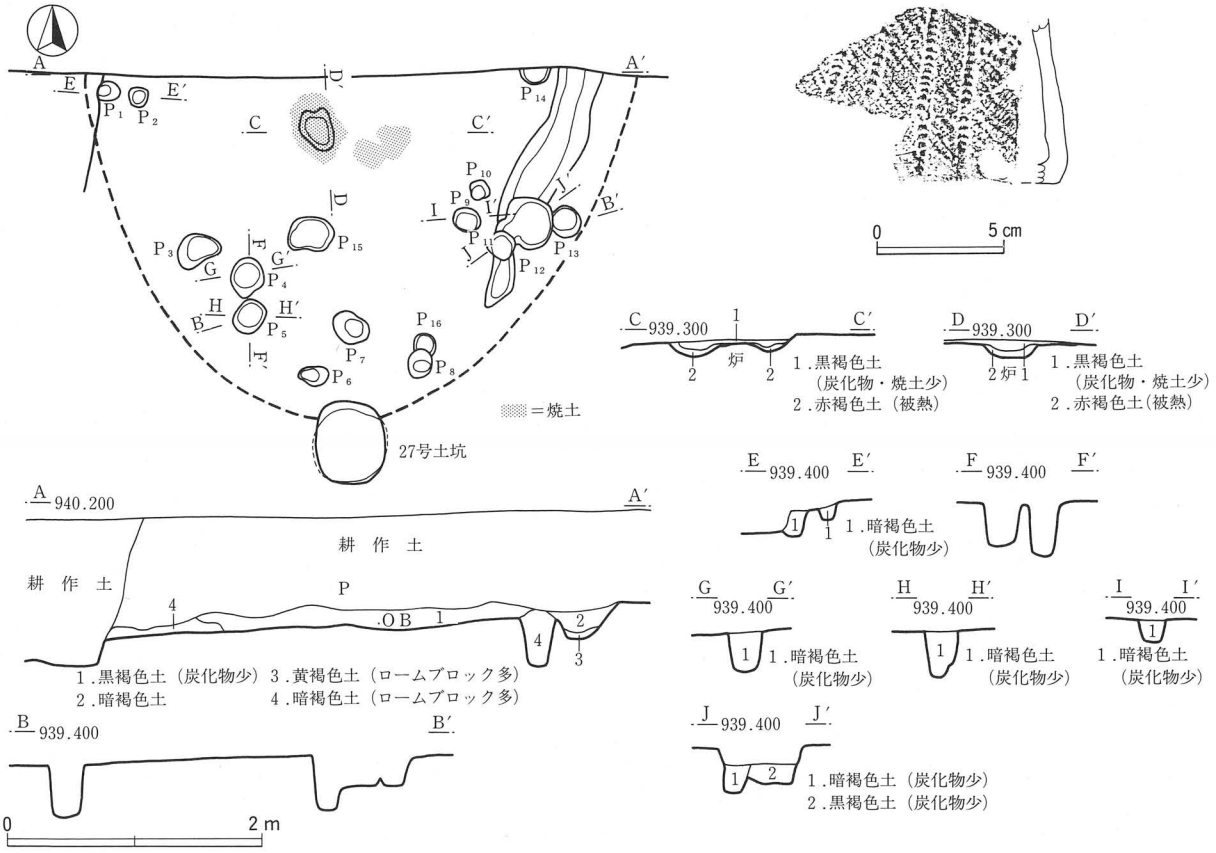
出土土器から、本址は縄文前期末～中期初頭に帰属すると考えられる。

第２号住居址（第５図・図版９・10）

検出状況　本址は調査区の中央から東側、E12グリッドで確認された。南側で第27号土坑と重複し、北側半分が調査区外にのびている。また、床面近くまで耕作が及んでおり遺存状況は悪い。

遺構の構造　住居址の壁は耕作で削平されており、規模と平面プランは不明な部分が多い。遺存する炉と周溝、柱穴の配置より楕円形に近い形状であったと考えられる。床面から16基のピットが検出され、配列と深さからP_1（20cm）・P_4（36cm）・P_5（44cm）・P_7（25cm）・P_{11}（43cm）・P_{14}（37cm）の６基が主柱穴に該当する。かなり不規則に配置する。そのほかのピットは、比較的浅い状況であった。平面的にはP_{11}・P_{12}、北側の土層断面ではP_{13}が周溝と重複関係にある。直接ローム面を床としているが、特に硬質な部分はない。床面はこまかな凹凸が激しく、炉を中心とした主柱穴に囲まれた内部が若干低くなる状況であった。炉と思われる２か所の焼土は主柱穴に囲まれた中央部で確認され、柱穴との位置関係から、西側の焼土が主柱穴と対応する可能性が高い。東側の焼土は建て替えによるものとも考えられるが、対応する柱穴は不明である。炉の構造は、地床炉であったと思われる。覆土は、周溝・柱穴も含めて４層に分層された。西側の床面上にローム粒を含有する暗褐色土（４層）、周溝内に黄褐色土（３層）と暗褐色土（２層）が堆積し、住居址中央部にローム粒と若干の炭化物を含有する黒褐色土（１層）が埋まる。１層には、少量の土器片が含有していた。

遺物の出土状況　土器は覆土とP_8・P_{16}より若干出土した程度であった。大半の土器は時期の判別が不可能であったが、縄文前期末～中期初頭の土器片が認められた。また、P_3・P_7・P_8・P_{12}より黒耀石の剝片、炉址より石鏃が出土した。出土土器から、本址は縄文前期末～中期初頭に帰属すると考えられる。



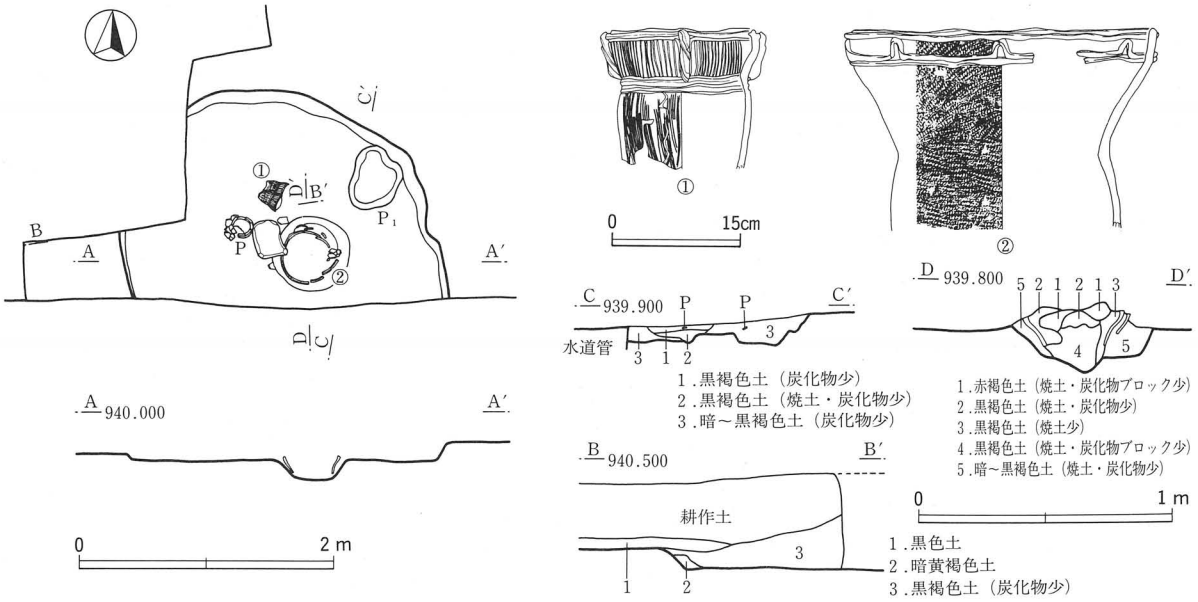
第５図　第２号住居址（1/60、遺物1/3）

第３号住居址（第６図・図版11～13）

検出状況　本址は調査区の東側、１号住居址と隣接するA16グリッドで確認され、師岡平遺跡と接する遺跡の東端に位置している。住居址は北西隅が調査区外にのびており、南側は水道管敷設のため破壊されている。詳細な規模と形状は不明である。

遺構の構造　住居址の全容を把握できなかったため平面プランは不明な部分が多いが、調査した範囲からすると、直径250cmの円形及び不整円形を呈していたと考えられる。壁の立ち上がりは北側と東側が最も明瞭であり、壁高は19.5～20.5cmを測る。西側は耕作の影響で遺存状況が悪い。主柱穴や周溝、壁際をめぐる小孔は検出されていない。唯一北東側でピット（P_1）が検出された。直接ローム面を床としているが、床面に硬質な部分はなく、全体的に軟弱で、若干の凹凸がある。炉は住居址のほぼ中央で検出された。構造は土器を直接埋めた埋甕炉で、幅58cmほどの浅い掘り方をもつ。炉体土器は底部を欠損し正位で埋設しており、土器内にはブロック状の焼土が多量に遺存していた。覆土は南北ベルトで３層、東西ベルトで２層に分層された。南北ベルトでは、ローム粒と炭化物粒を含む暗褐色～黒褐色土がP_1と床面に堆積し、中央部に黒褐色土（１・２層）が堆積する。

遺物の出土状況　埋甕炉の炉体土器は曽利Ⅱ式である。床面より浮いた状態で縄文中期後半の土器が出土した。また、覆土より黒耀石の剝片が出土した。土器から、本址は縄文中期後半に帰属すると考えられる。



第６図　第３号住居址（1/60、遺物1/6）

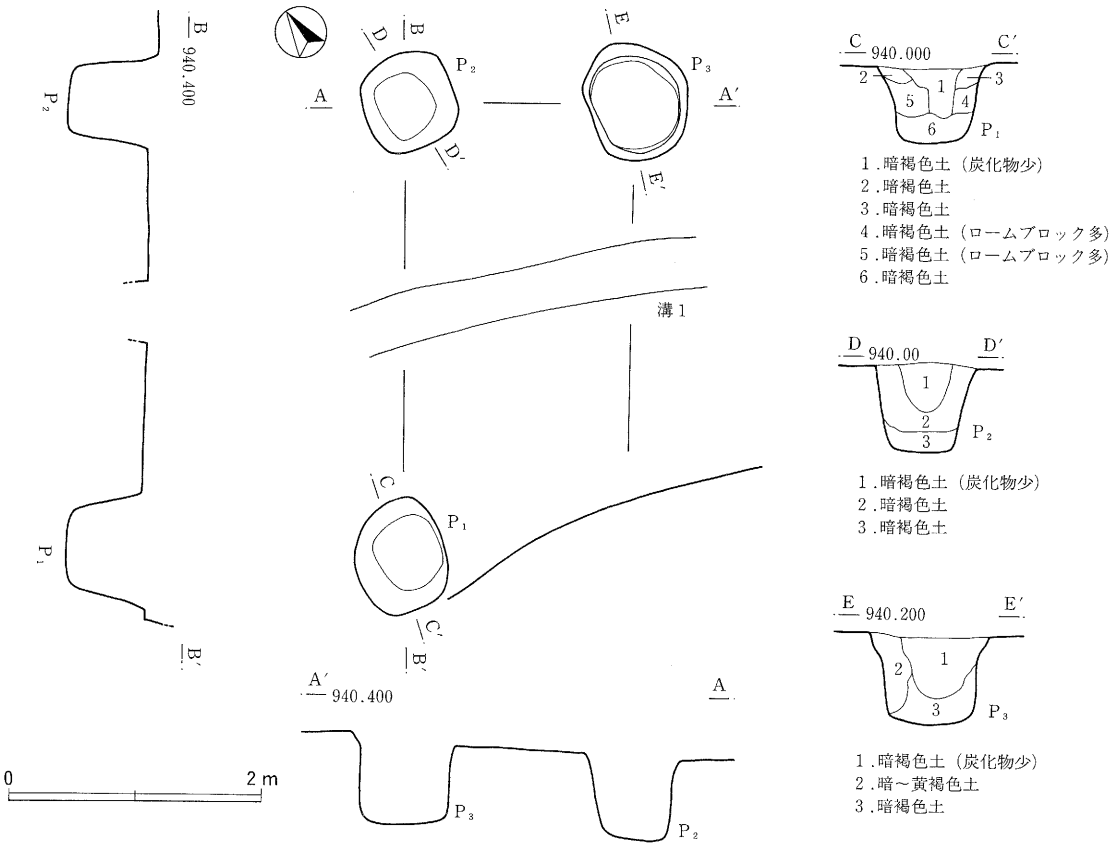
２.方形柱穴列

調査区の東側では、ほぼ垂直に掘り込まれてかなりの深さをもつ円形の柱穴が方形に並ぶ遺構が２基確認された。調査時では、覆土が削平された住居址の主柱穴及び方形柱穴列を想定したが判断できなかった。しかし、炉址及び他の柱穴が確認されないことから、「方形柱穴列」と認定した。なお、調査区内で２基が近接して確認されたことと主軸がきわめて酷似することから、同時に存在していたと考えられる。

第１号方形柱穴列（第７図・図版14～18）

本址は、調査区中央部から東側、D13・14グリッドで確認された。約50cmの間隔をおいて東側には２号方形柱穴列があり、両者はかなり近接する。なお、２号方形柱穴列とは基本的に主軸が一致する。

検出状況　本址は、北より35°東に振る主軸で、南西―北東方向に長軸をもつ長方形の平面プランを呈して



第7図　第1号方形柱穴列（1/60）

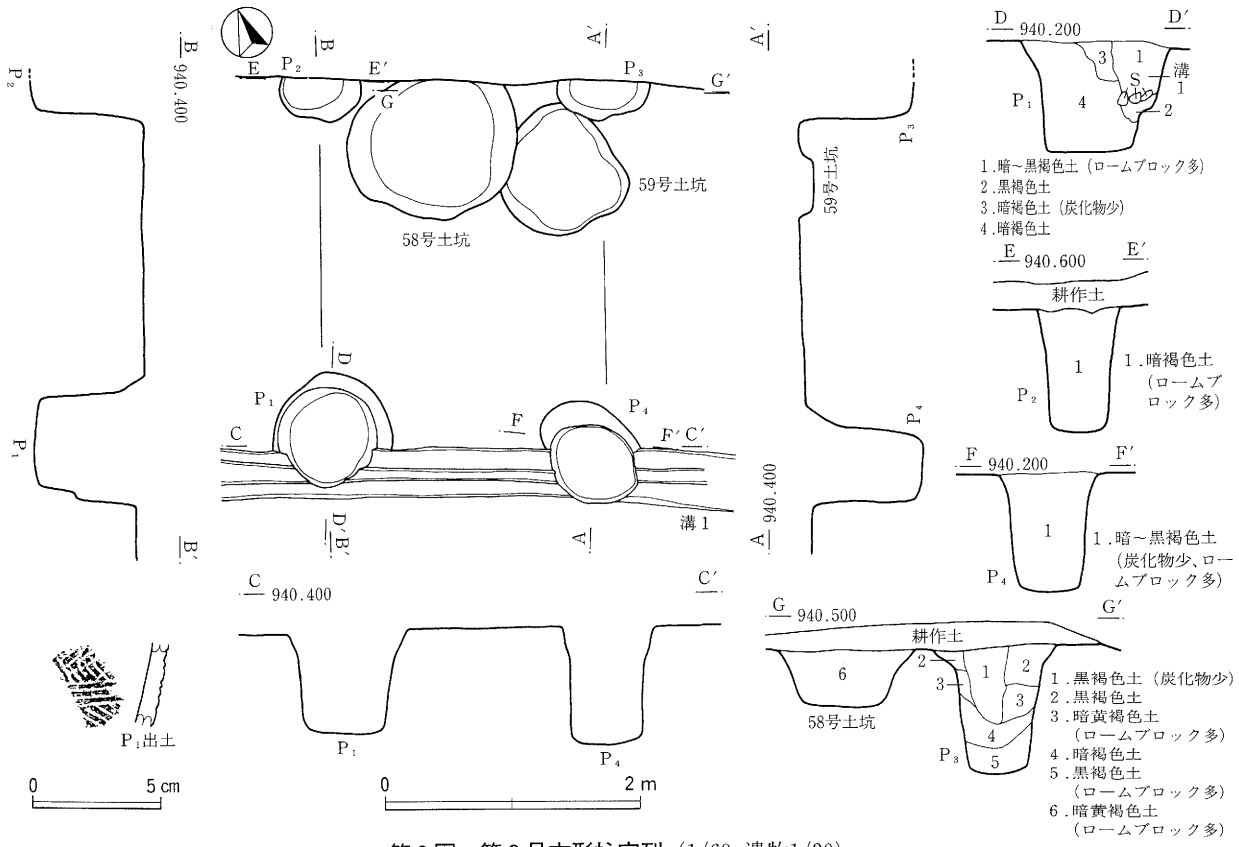
いる。本址に帰属する柱穴は3基検出され、P_1と対応する柱穴が調査区外に存在すると考えられる。周辺の遺構との直接的な重複関係はないが、柱穴が方形に囲む内部を溝1が切っている。

遺構の構造　本址は、北より35°東に振る主軸をもち、南西―北東方向に長軸をもつ長方形の平面プランを呈している。確認された柱穴は3基であるが、調査区外に南西側のP_1に対応する柱穴が存在すると思われる。遺構の全容は把握されていないが、柱穴の配列からすると、P_1が長辺の中心となり6基で構成された遺構と考えられる。柱穴の深さは、P_1は61cm、P_2は72cm、P_3は68cmを測り、2号方形柱穴列と同様、東側の柱穴が若干深い傾向がある。さらに、柱穴は遺構の長辺方向に長い隅丸長方形を示し、P_2とP_3の底部は長方形に近い形状である。掘り方は、垂直に近い立ち上がりをもち、底部はほぼ水平に近い。柱穴の土層堆積状況は、ロームブロックを含む暗褐色土等により埋められており、P_1・P_2で柱痕が確認された。P_3では、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を埋めて柱を固定した状況が確認された。なお、柱穴に囲まれた内部には硬化した面等は見られなかった。出土遺物はなく本址の時期は不明であるが、構造と周辺での類例から縄文後期に帰属する遺構と考えられる。

第2号方形柱穴列（第8図・図版14・19～21）

検出状況　本址は、調査区中央部よりやや東側のD14グリッドで確認された。西側には1号方形柱穴列がある。

遺構の構造　本址は、北より29°東に振る主軸をもち、南西―北東方向に長軸をもつ長方形の平面プランを呈している。P_1・P_4は溝1と、P_3は59号土坑と重複する。本址と58号土坑は直接的な重複関係はない。本址は南側が調査されたにすぎず、北側の調査区外にのびている。したがって、遺構の全容は把握されていないが、柱穴の配列からするとP_2・P_3を中心として6基の柱穴で構成されていた遺構と考えられる。柱穴の深



第8図　第2号方形柱穴列（1/60、遺物1/30）

さは、P_1は86cm、P_2は90cm、P_3は94cm、P_4は95cmを測り、東側のものが若干深い傾向がうかがえる。なお、P_1・P_4が溝1で壊され、P_2・P_3は半分が調査区外である。柱穴の詳細な規模は不明であるが、90cmほどの規模であったと思われる。掘り方は、垂直に近い立ち上がりをもち、底部はほぼ水平に近い。柱穴の土層堆積状況は、ロームブロックを含む暗褐色土等により埋められており、柱痕が確認されたP_3では黒褐色土・暗褐色土等の水平堆積が認められ、柱を固定した状況がうかがえた。柱穴に囲まれた内部には、硬化した面等は見られなかった。遺物は、P_1より縄文前期末～中期初頭の土器片が出土しているが、本址の時期は1号方形柱穴列と同様、縄文後期に帰属する遺構と考えられる。

3．落し穴（第28・29・30・31・32・38・40・46・57号土坑）（第9図・図版22～32）

調査では、64基の土坑が検出された。そのなかで、平面プランと断面形及び属性から縄文時代の落し穴と考えられる遺構が9基確認された。これら落し穴の平面プランには、円形と方形の2種類があり、方形のものは調査区東端から中央部に分布し、特にE9・10グリッドで密集する状況が確認された。落し穴の主軸では、28号土坑と57号土坑が異なるが、ほかは基本的に一致している。また、円形のものは調査区中央と東側に分布し、方形のものと分布域が異なる状況である。したがって、本遺跡には分布域が異なる円形と方形の落し穴が存在しており、方形のものは配置と主軸から2群に分けることができる。両群とも尾根を横断する形で配置している。

第28号土坑　本址は、D11・E11グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径246cm・短径200cmを測る。遺構の長軸はほぼ東西方向を示し、N-88°-Eの主軸である。断面形は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段より広がる特徴をもつ。底部までの深さは107cmを有する。なお、本址の南西側を除く3か所の隅には、クイ等を打ち込んだ形跡と推定される小孔が確認された。底部は、長径115cm・短径37cmを測り、長

端が若干突出し中央部が狭まる分銅形を呈する。坑底には、ほぼ中央部に２基の小孔がある。小孔は約25cmの深さをもち、逆茂木を付設した際の掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、底部と壁際にローム層を基調とした暗～黄褐色土と多量のロームブロックを含有する暗褐色土が堆積し、上部に炭化物粒が散在する黒褐色土が堆積する。遺物は、黒耀石の剥片が３点出土している。

第29号土坑　本址は、調査区中央部のＥ10グリッドに位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長径164cm・短径108cmの規模を有する。長軸は北西―南東方向で、N-55°-Wの主軸を示す。本址は、48号土坑と重複関係があり、土層断面では、本址が切られる状況が確認されている。検出面から底部までは54cmの深さがあり、断面形は底部からほぼ垂直に中段付近で広がる形状である。底部は、長径130cm・短径56cmの分銅形で、中央部に小孔が１基存在する。小孔は19cmと比較的浅いものの、逆茂木を付設した際の掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、壁際に多量のロームブロックを含有する暗～黄褐色土が堆積し、中央にロームブロックと炭化物粒を含む黒褐色土が堆積している。出土遺物はなし。

第30号土坑　本址は、調査区中央部のＥ９・10グリッドに位置する。約50cm東側には29号土坑、130cm北側には31号土坑があり、本址は落し穴が近接して密集するなかで最も南側に位置する。平面プランは、近接する29号土坑と同様、隅丸長方形で長径170cm・短径87cmの規模を有する。東西方向に長軸をもち、主軸はN-72°-Wを示す。検出面から底部までは67cmの深さがあり、断面形は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から広がる形状である。底部は、長径127cm・短径45cmの長方形で、中央付近に２基の小孔が検出された。小孔の深さは43cmと34cmで、西側が若干深い状況である。この小孔は、底部の形状から逆茂木を付設する際の掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、底部に硬質な暗褐色土が薄く堆積し、壁際にローム基調の黄褐色土、上部にロームを多量に含有した黄褐色土と黒褐色土が堆積している。出土遺物はなし。

第31号土坑　本址は、落し穴が密集するＥ９・10グリッドに位置し、約15cmの間隔をおいて北側には２号土坑が近接する。周辺の遺構との重複関係では、東西に走る溝１に切られている。平面プランは、東西に長軸をもつ長方形で、長径141cm・短径126cmの規模を有する。主軸はN-60°-Wを示し、近接する落し穴と酷似する。検出面から底部までは36cmの深さがある。断面形は、南側の一部は溝１に切られているが、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近で広がる傾向が見られる。底部は、長径111cm・短径81cmで、長辺の中央部がやや内側に狭まる長方形を示している。本址でも底部から２基の小孔が検出され、21～23cmの深さをもつ。この小孔は、底部の形状から逆茂木を付設する際の掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、ロームブロックを含有する暗褐色土が堆積していた。出土遺物はなし。

第32号土坑　本址は、Ｅ９・10グリッドに位置し、31号土坑ときわめて近接する。遺構の北側が調査区外にのびているが、平面プランは、東西に長軸をもつ隅丸長方形と考えられ、長径171cm・短径115cm（推定）の規模を有する。主軸はN-74°-Wを示し、近接する30・31号土坑と酷似する。検出面から底部までは62cmの深さがあり、断面形は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に広がる特徴がある。底部は、長径132cm・短径57cmの長方形を示し、坑底から２基の小孔が検出された。２基とも30cmの深さをもち、底部の形状から逆茂木を付設した際に掘削した掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、壁際と底部にロームを基調とした硬質の黄褐色土が堆積し、上部に炭化物粒を含む暗褐色土、最上層に黒褐色土が堆積している。出土遺物はなし。

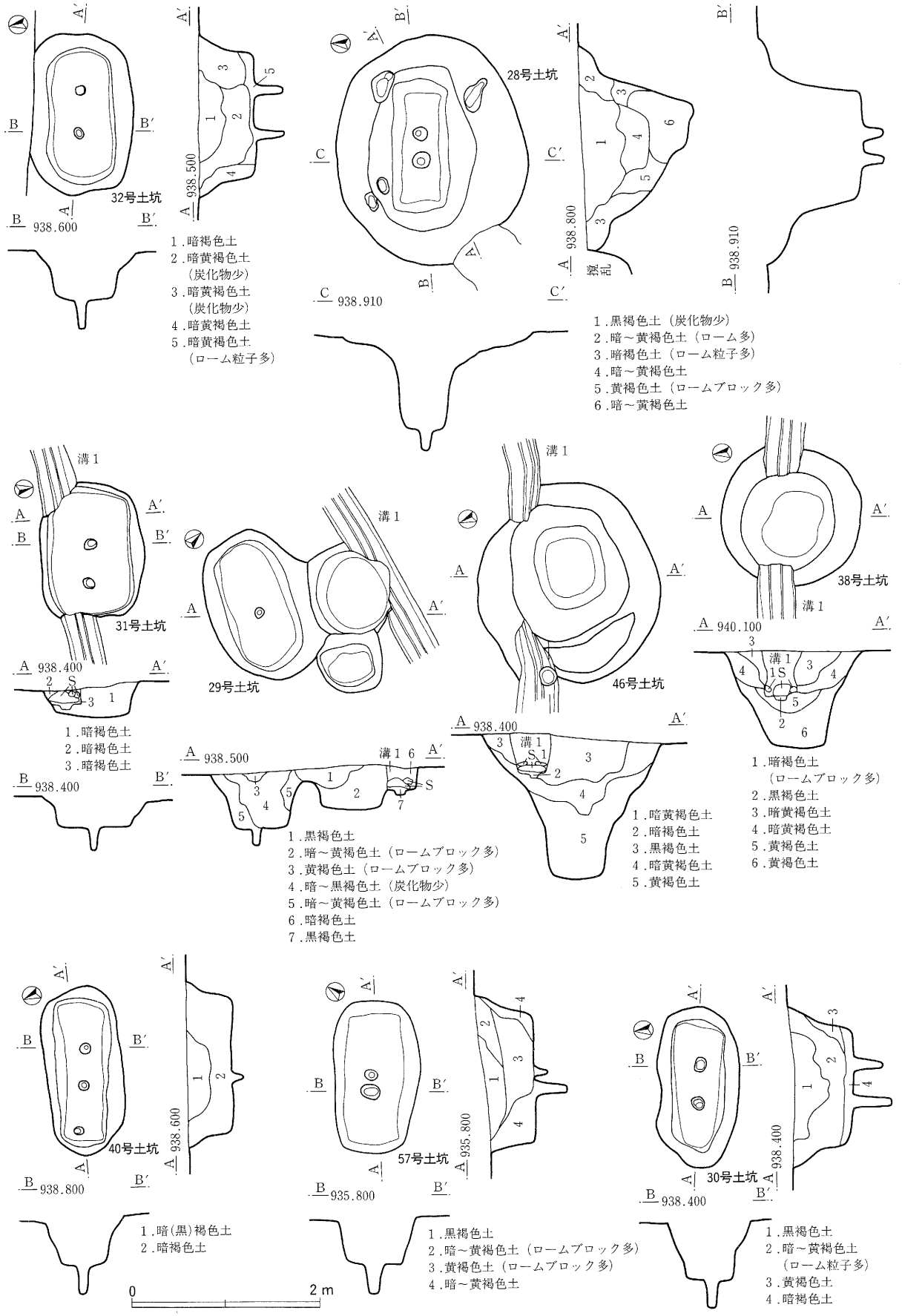
第38号土坑　本址は、調査区東側のＤ13グリッドに位置し、落し穴が密集した場所から離れて単独で存在する。本址は東西に走る溝１と重複関係がある。平面プランは円形で、直径151～154cmの規模を有する。検出面から底部までは105cmの深さがある。底部はほぼ平坦で、長径33cm・短径28cmで中央部が内側に狭まる隅

丸長方形を示す。本址は円形であるが、低部の形状からN-55°-Wの主軸を導き出すことができる。断面形は基本的に円筒形で、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に広がる特徴がある。底部から小孔は確認されていない。土層の堆積状況は、底部から中段付近までローム基調の硬質の黄褐色土が堆積し、その上部に暗褐色土が堆積する。出土遺物はなし。

第40号土坑　本址は、調査区中央部のＥ９グリッドに位置する。平面プランは東西に長軸をもつ隅丸長方形で、長径180cm・短径82cmの規模を有する。主軸はN-62°-Wで、近接する落し穴と基本的に一致する。断面形は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に広がる形状である。底部はほぼ平坦であり、長径146cm・短径39cmを測る。底部は、長方形に酷似した形状であるが、長辺の隅が突出し、中央部が内側に狭まる分銅形を示している。北・南側の壁が狭まった中央部で、２基の小孔が検出された。小孔は23～29cmの深さをもち、底部の形状から逆茂木を付設した際に掘削した掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、ロームブロックを含有する暗褐色土が堆積し、上部の凹みに黒褐色土が堆積する。出土遺物はなし。

第46号土坑　本址は、調査区中央部よりやや西側のＥ８・９グリッドに位置する。周辺の遺構との重複関係では、東西に走る溝１に切られていることが明瞭に確認されたが、本址と溝１底部で確認された89号土坑との新旧関係は不明である。平面プランは、基本的に円形であるが、隅丸方形にも酷似する形状で、長径212cm・短径191cmの規模を有する。調査区中央のＥ９・10グリッドで見られた方形プランの落し穴が密集するグループより、若干西側にはずれる。規模と形状から、38号土坑と同形態の落し穴と認識できるが、構造的に本址の中段より上部にテラス状の平坦部が存在する点で相違点が見られる。検出面から底部までは151cmを測り、落し穴のなかで最も深さをもつ遺構である。底部はほぼ平坦で、形状は長径61cm・短径50cmの長方形を示す。本址の平面形は円形であるが、底部の形状からN-62°-Wの主軸を導き出すことができる。断面形は、基本的に円筒形で、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に広がる特徴がある。底部から小孔は確認されていない。土層の堆積状況は、中段付近までローム基調の黄褐色土が堆積し、上部の壁際に暗褐色土、凹み状となった最上部に黒褐色土が堆積する。出土遺物はなし。

第57号土坑　本址は、調査区西端のＦ２・３グリッドに位置する。平面プランは隅丸長方形で、長径164cm・短径91cmの規模をもつ。主軸は、N-59°-Ｅで、調査区中央に分布する方形の落し穴と異なる方向を示している。このことから、方形プランの落し穴は、調査区西端と中央部の２群が存在しているものと考えられる。検出面から底部までは57cmの深さをもち、断面形は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に広がる形状である。底部はほぼ平坦で、長径140cm・短径73cmを測る長方形であるが、長辺の四隅が若干突出する傾向がある。坑底からは２基の小孔が検出された。小孔は、南西側は34cmの深さがあり、北東側はやや浅く、深さに異なりがあるが、２基とも逆茂木を付設した際に掘削した掘り方と考えられる。土層の堆積状況は、壁際にローム基調で硬質の暗～黄褐色土、遺構の中央部に黄褐色土が堆積する。その上部に黒褐色土が堆積する。出土遺物はなし。


32号土坑
938.600
938.500
1.暗褐色土
2.暗黄褐色土
(炭化物少)
3.暗黄褐色土
(炭化物少)
4.暗黄褐色土
5.暗黄褐色土
(ローム粒子多)
28号土坑
938.910
938.800
撹乱
938.910
1.黒褐色土(炭化物少)
2.暗～黄褐色土(ローム多)
3.暗褐色土(ローム粒子多)
4.暗～黄褐色土
5.黄褐色土(ロームブロック多)
6.暗～黄褐色土
溝1
31号土坑
938.400
1.暗褐色土
2.暗褐色土
3.暗褐色土
938.400
29号土坑
938.500
1.黒褐色土
2.暗～黄褐色土(ロームブロック多)
3.黄褐色土(ロームブロック多)
4.暗～黒褐色土(炭化物少)
5.暗～黄褐色土(ロームブロック多)
6.暗褐色土
7.黒褐色土
46号土坑
938.400
1.暗黄褐色土
2.暗褐色土
3.黒褐色土
4.暗黄褐色土
5.黄褐色土
38号土坑
940.100
1.暗褐色土
(ロームブロック多)
2.黒褐色土
3.暗黄褐色土
4.暗黄褐色土
5.黄褐色土
6.黄褐色土
40号土坑
938.600
938.800
1.暗(黒)褐色土
2.暗褐色土
57号土坑
935.800
935.800
1.黒褐色土
2.暗～黄褐色土(ロームブロック多)
3.黄褐色土(ロームブロック多)
4.暗～黄褐色土
30号土坑
938.400
938.400
1.黒褐色土
2.暗～黄褐色土
(ローム粒子多)
3.黄褐色土
4.暗褐色土
0
2 m

第9図　落し穴 (1/60)

4．土　坑（第10・11・12・13・14図、図版33～41）

今回の調査では多くの土坑が検出された。大半の土坑では遺物の出土がなく、時期決定が困難なものが多い。しかし、竪穴住居址・方形柱穴列の存在から基本的に縄文時代に帰属すると考えられる。これらには、規模・形状、覆土の堆積状況等に相違が見られ、多種多様な土坑の存在がうかがえた。これらの土坑については属性に起因して分類を行い、本項では各類型ごとに報告する。これはあくまでも属性分類であり、各類型がかならずしも遺構の性格を示しているわけではないことを明記しておく。なお、89・90・91・92・93号土坑は、近代の遺構であるが、土坑としてここで併せて述べる。

第Ⅰ群　平面プランが基本的に円形の土坑群である。規模と断面形状により４類に分類することができる。

１類（第２・３・４・38・58・88号土坑）　平面プランが円形で、構造的にはしっかりとした掘り方をもつ土坑である。底部は平坦で、明瞭な中段がなく検出面まで緩やかに立ち上がる断面形状である。覆土は数層に分層され、基本的に人為的に埋め戻された土層堆積状況を示している。なお、58号土坑では覆土中に礫が混入しており、土器片が含まれている覆土最上部では焼土粒が多量混入した層と被熱により赤褐色化した層が確認されている(調査では、焼土址１として記録)。土坑が埋没する過程での二次的な利用があったものと推測される。遺物の出土状況は、２号土坑と３号土坑より前期末の土器片、４号土坑（１点）より黒耀石の剝片、58号土坑の焼土面より縄文前期末～中期初頭と中期後半の土器片、さらに黒耀石の剝片（７点）が出土している。

２類（第１・７・８・33・94号土坑）　平面プランが円形で、構造的にはしっかりとした掘り方をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がり中段付近で広がる土坑である。覆土は数層に分層され、土層堆積状況は、１号住居址と重複関係にある94号土坑が単一層で、ほかの土坑は底部に硬質な暗褐色土が薄く堆積し、壁際には壁の崩落と思われるローム基調の層が堆積する。凹み状となった部分に埋め戻したと思われるロームブロック等が含有する暗～黒褐色土が堆積している。遺物は、１号土坑より縄文前期末の土器片と黒耀石の剝片、７号土坑より縄文前期末の土器片、33号土坑より縄文前期末の土器片と黒耀石の剝片が出土している。

３類（第13・15・26・39号土坑）　平面プランが円形で、１・２類のような深さを有する土坑ではなく、掘り方が浅いもの。底部はほぼ平坦で、壁は底部から緩やかに立ち上がる状況で、15号土坑では小孔が確認されている。土層堆積状況は、壁際に崩落と推定されるローム基調の層が堆積する土坑もあるが、基本的に単一層である。なお、平面形を基準として分類したため、26号土坑を本種に含めたが、一部でフラスコ状を呈する断面形状が見られ、土器片が比較的多く出土している。かかる属性から、Ⅰ群２類に該当する土坑の上部を削平された可能性が高い。遺物は、15号土坑より縄文前期末の土器片、26号土坑より前期末の土器と黒耀石の剝片が９点出土している。

４類（第27号土坑）　平面プランが円形で、１類・２類と比べて規模が小さいが、構造的にはしっかりとした掘り方を有し、断面形がフラスコ状を示す土坑である。土層堆積状況は、底部に炭化物が混在する暗褐色土、上部にロームブロックが含有する暗褐色土が堆積し、人為的に埋め戻された可能性が高い。本種に該当する土坑の性格については、断面の形状と覆土の堆積状況より、貯蔵穴との推定がされよう。遺物は前期末の土器片が出土している。

第Ⅱ群　平面プランが方形もしくは楕円形の土坑群である。規模と形状により、５類に分類できる。

１類（第21・47号土坑）　平面プランが方形で、Ⅱ群のなかで最も規模が大きく、掘り方が比較的浅い土坑である。底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる状況である。覆土は数層に分層されたが、自然堆積を思わせる土層堆積状況を示している。

2類（第19・22・25・59・87号土坑）　平面プランが隅丸方形で、1類より若干規模が小さく掘り方が浅い土坑である。底部には、こまかな凹凸があるがほぼ平坦で、19・22号土坑は小孔を伴っている。断面は、底部から緩やかに立ち上がり、上面でやや開く傾向がある。土層堆積状況は、黒褐色土及び暗褐色土が埋まる単一層を示しており、調査区南壁にかかった22号土坑は、2層に分層された。遺物は、19号土坑より縄文土器片、25号土坑より中期初頭の土器と黒耀石の剝片、59号土坑より前期末の無文土器が出土している。

3類（第5・6・12・14・41・44・51・53・69・76・86号土坑）　1・2類よりさらに規模が小さい土坑で、平面プランが楕円形もしくは隅丸方形を示し、掘り方が浅い。土層堆積状況は、基本的に単一層であるが、14・53号土坑で壁際の崩落土等、自然堆積を思わせる状況が確認されている。遺物は、14号土坑より縄文土器片、76号土坑より縄文前期末～中期初頭の土器片、76号土坑より黒耀石の剝片が1点出土している。

4類（第48・70号土坑）　3類と同規模で、平面プランは方形が基本の土坑である。構造的にはしっかりとした掘り方を有し、底部が平坦を示す。断面は円筒形で、壁は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に開く特徴がある。底部と中段は、基本的に方形である。土層堆積状況は、70号土坑は不明であるが、48号土坑はロームブロックが多量混入している暗褐色土が覆土の大半を占めており、上部に黒褐色土が堆積する。

5類（第10・45・50・55・61・73・74・95号土坑）　3・4類と同規模で、平面プランが隅丸長方形を示す土坑である。基本的に掘り方は浅いが、61・95号土坑のように、底部が平坦でしっかりとした掘り方をもつものである。したがって、61・95号土坑は別な扱い方ができる可能性もある。土層堆積状況は、基本的に単一層で、61号土坑はロームブロックを多量混入する暗黄褐色土（2層）とわずかに炭化物粒を含む暗褐色土（1層）が堆積する。1層は柱痕の可能性が高く、2層は柱を支えるための層と考えられる。95号土坑は底部から中段上部まで粘性と締まりがある暗褐色土、上部に黒褐色土が堆積する。遺物は、45号土坑より赤色塗料のある縄文中期後半の土器片、61号土坑より縄文土器片、黒耀石製の石鏃と剝片が各1点出土している。

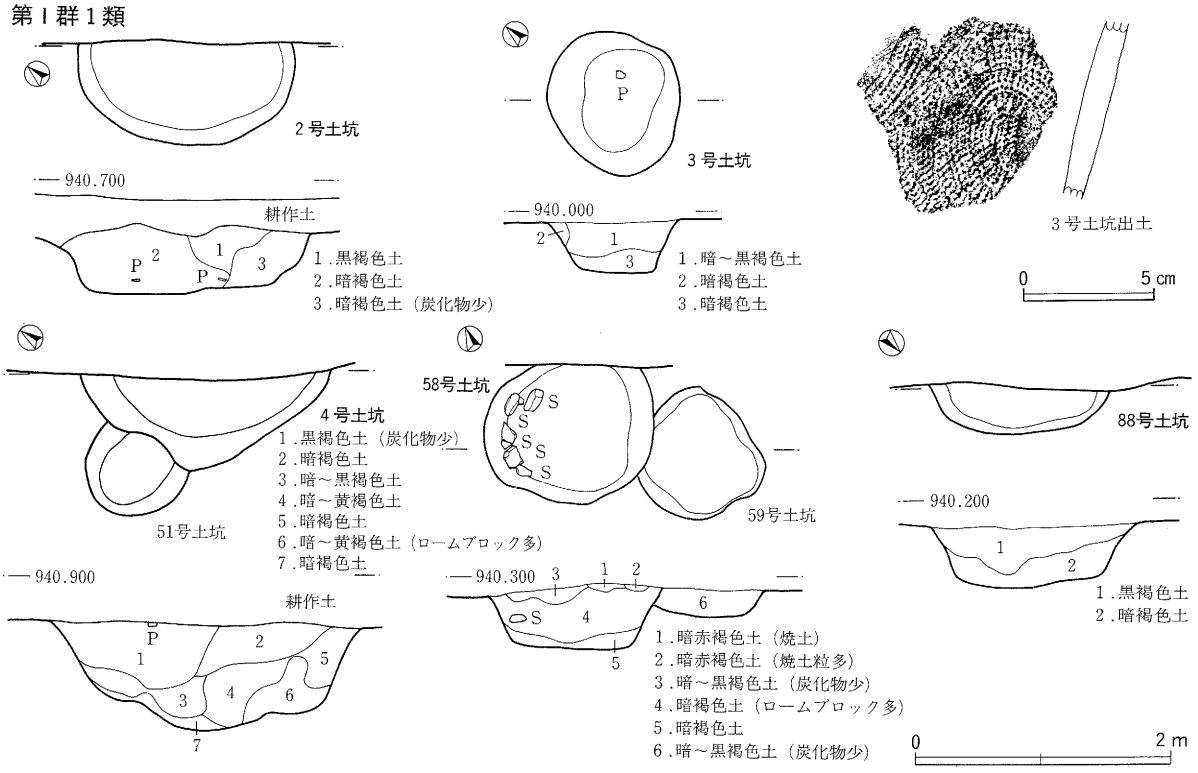
第Ⅲ群（第17・18・54・56号土坑）　Ⅱ群1類よりやや小規模である。平面プランは不整形を示し、掘り方が浅い土坑群である。土坑の底部には、こまかな起伏があり平坦なものは少ない。壁は、緩やかに立ち上がり、上面付近でやや開く傾向がある。覆土は数層に分層され、17号土坑を除き自然堆積を思わせる状況である。

第Ⅳ群（第9・11・16・23・24・34・35・42・62・72・75・77・85・89・90・91・92・93号土坑）　本遺跡のなかで最も小規模なピット状の土坑である。平面プランは、円形及び隅丸方形で、掘り方は浅く、断面形が皿状を示すものが基本的であるが、16・23・77号土坑のように、ある程度の深さをもつものもある。16号土坑は、底部が平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、中段付近から外側に開く特徴がある。なお、89・90・91・92・93号土坑は、溝1の南側と接するもしくは重複する形で一定間隔で配列する特徴がある。溝1との重複関係は不明であるが、覆土よりほぼ同時期の遺構と類推され、溝1を掘削する際に木等を立てる目的で掘られた穴と考えられる。覆土は、2層に分層される。中段付近までロームブロックと暗褐色土が混合した層、上部に黒褐色土が堆積する。23号土坑は、断面が円筒形を示し、覆土は底部にロームブロックと黒色土が混合した層、上部に黒褐色土が堆積している。77号土坑は、検出面から底部まで76cmの深さをもち、断面形は柱穴状を示す。覆土は、黒褐色土の単一層である。そのほかの土坑は、黒褐色土（9・11・62・72・75・85号土坑）、暗褐色土（42号土坑）、暗～黒褐色土（34・35号土坑）の単一層である。遺物は、9号土坑より縄文中期初頭の土器片、35号土坑より石英が1点出土している。

遺物出土状況と土層堆積状況　土坑の覆土から遺物の出土が少ないが、遺物が検出されたものを見ると、円形を示し底部が平坦でしっかりとした掘り方をもつ2・58号土坑（Ⅰ群1類）と27号土坑（Ⅰ群4類）から縄文前期末の土器片、1・7・8・33号土坑（Ⅰ群2類）から前期末～中期初頭の土器片、58号土坑（Ⅰ群1類）より中期後半の土器片が出土している。これらの土坑では、覆土が数層に分層され、7号土坑では埋め戻しの際に、1・33号土坑は自然に埋没する過程で流入したものと思われる。なお、58号土坑では覆土最上層から焼土面が確認されており、遺物はこの二次的な利用に伴うものである。さらに、掘り方が浅い15号土坑（Ⅰ群3類）でも前期末の土器が出土している。Ⅱ群では、19号土坑（Ⅱ群2類）と76号土坑（Ⅱ群3類）より前期末～中期後半、25号土坑（Ⅱ群2類）より中期初頭、45号土坑（Ⅱ群5類）より赤色塗料のある縄文中期後半、19号土坑（Ⅱ群2類）より縄文中期後半の土器が出土している。単一層の土坑が多く、人為的埋没か自然埋没かは判断できない。Ⅳ群では、9号土坑より中期初頭の土器片が出土している。

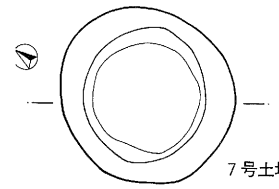
以上の出土遺物から、19・45・58号土坑は中期後半に、1・2・3・7・9・15・25・27・33・43・76号土坑は前期末～中期初頭に帰属するものと考えてよかろう。なお、本遺跡の土坑は後者のものが多いことから、遺物が出土しない大半の土坑は、縄文前期末～中期初頭に帰属する可能性が考えられる。

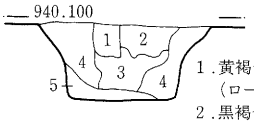
土坑の性格　土坑は基本的に「穴」であり、その用途により掘削方法と形状に差異が生じていると考えられる。調査で確認された土坑について、ここでは大雑把に4分類が可能であったため、類型から土坑の用途を考えてみたい。本遺跡で特徴的な土坑として、構造的にしっかりとした掘り方をもつⅠ群がある。Ⅰ群2類に代表される円形の土坑は、壁は平坦を示す底部からほぼ垂直に立ち上がり中段付近で開く特徴と、覆土が数層に分層される状況から、構造的に卓越している。これらの土坑と、上部が削平された円形の土坑（Ⅰ群3類）とフラスコ状の断面を示すⅠ群4類が、縄文前期末～中期初頭の所産であることから、用途的には貯蔵穴・ゴミ穴が想定される。上記以外の土坑については、属性から用途を想定することは困難である。今後、縄文前期末～中期初頭に帰属する「穴」としての検討が必要であろう。

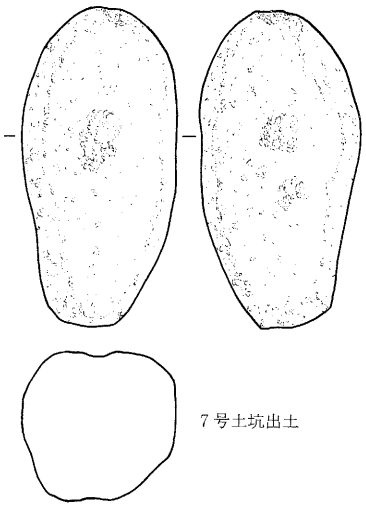


第10図　土　　坑①（1/60、遺物1/3）

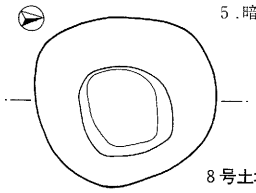
第Ⅰ群2類

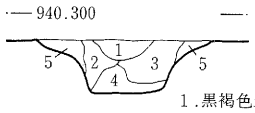


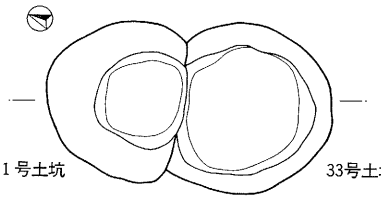


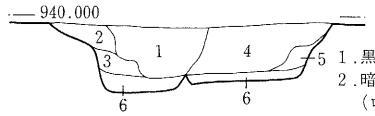


0 5cm

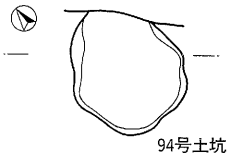


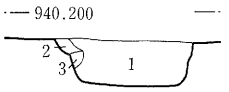






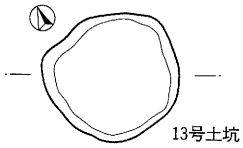
1.黒褐色土
2.暗褐色土
(ロームブロック多)
3.暗褐色土
4.暗～黒褐色土
5.暗褐色土
6.暗褐色土

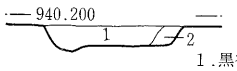




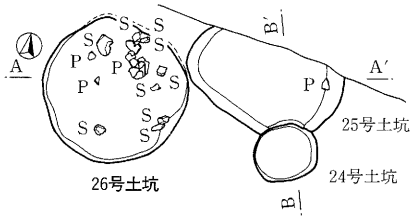
1.黒褐色土
(炭化物少)
2.暗褐色土
3.暗～黄褐色土
(ロームブロック多)

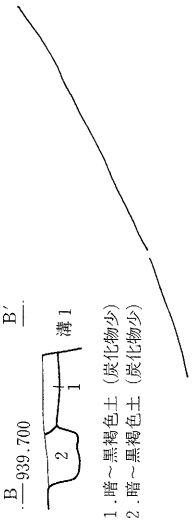
第Ⅰ群3類

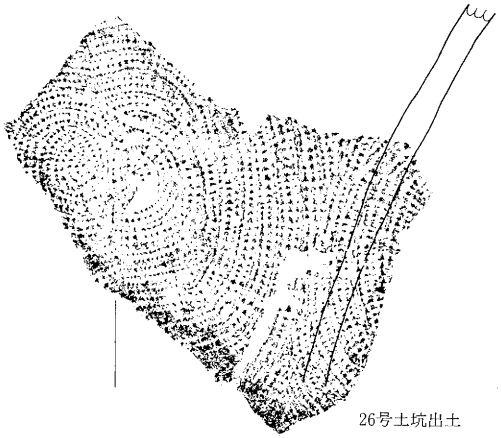


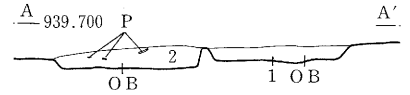


1.黒褐色土
2.黄褐色土







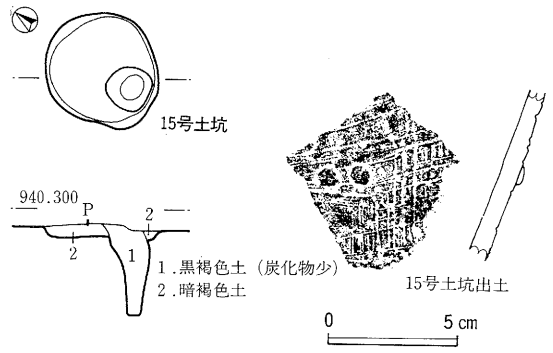


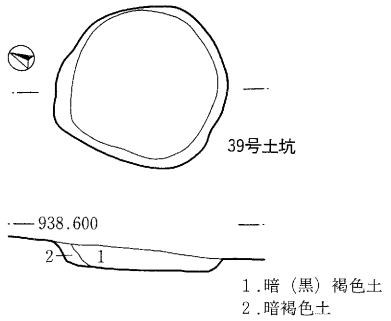
1.黒褐色土
2.黒褐色土

0 2m

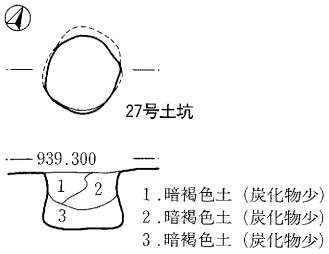
0 5cm

第11図　土　　坑②（1/60、遺物1/3）

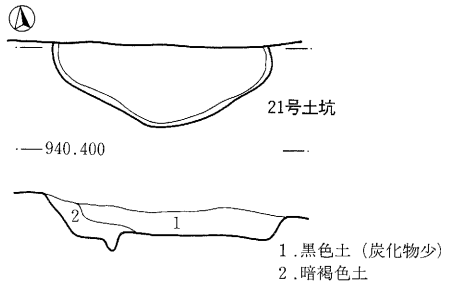




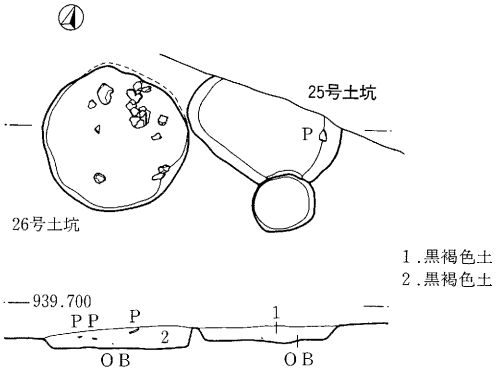
第Ⅰ群4類

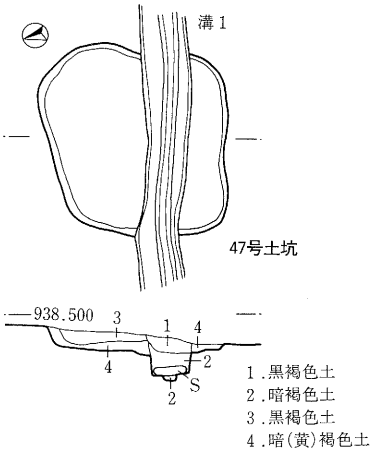


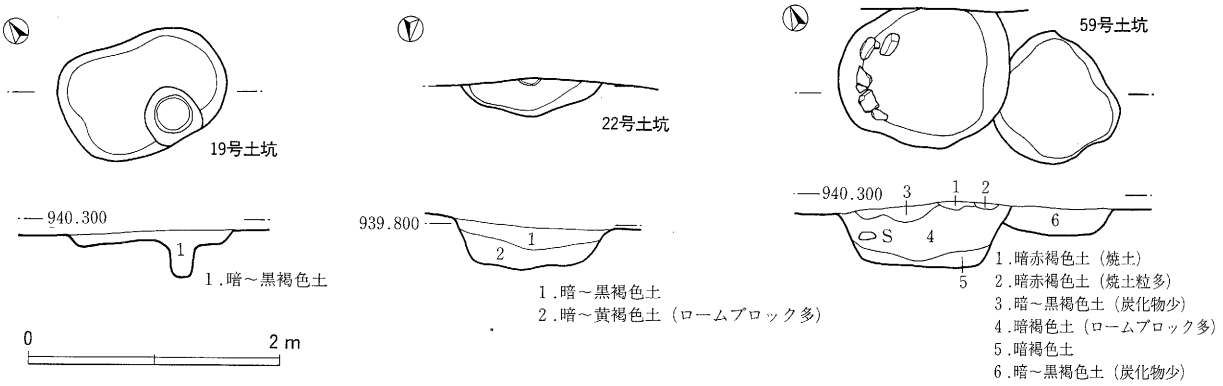
第Ⅱ群1類



第Ⅱ群2類

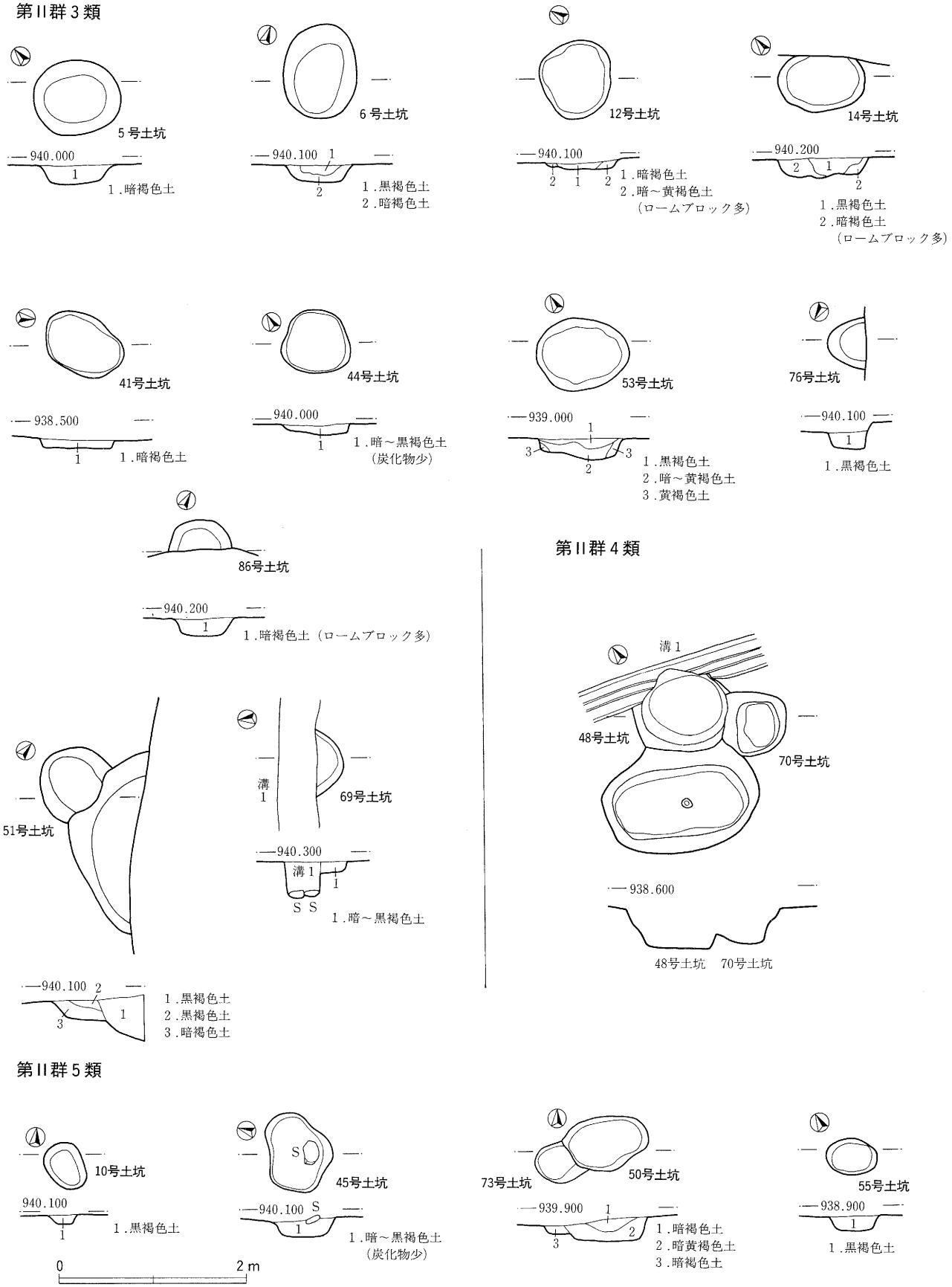




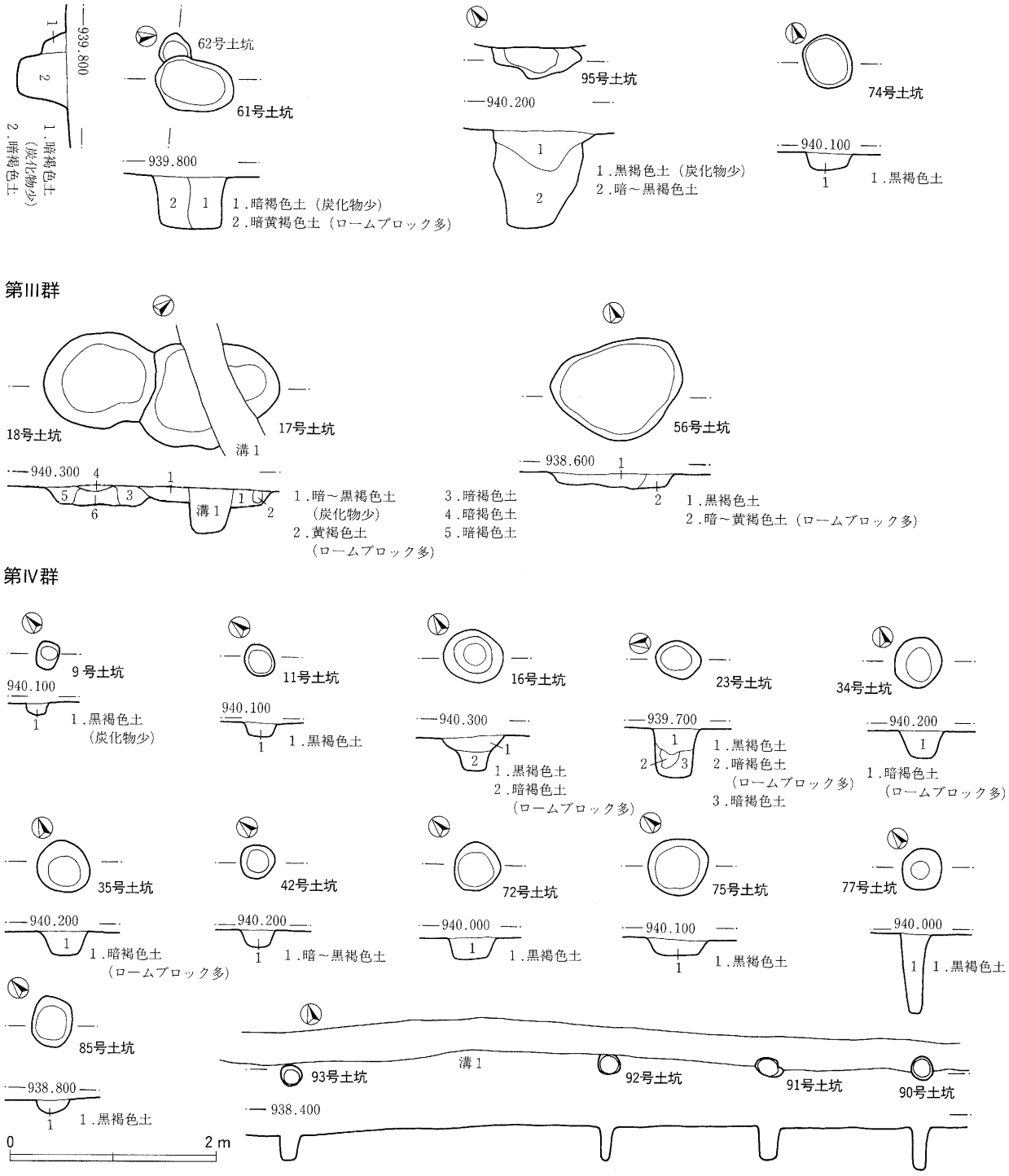


第12図　土　　坑③（1/60、遺物1/3）

第II群3類



第13図　土　　坑④ (1/60)



第14図　土　　坑⑤（1/60、遺物1/3）

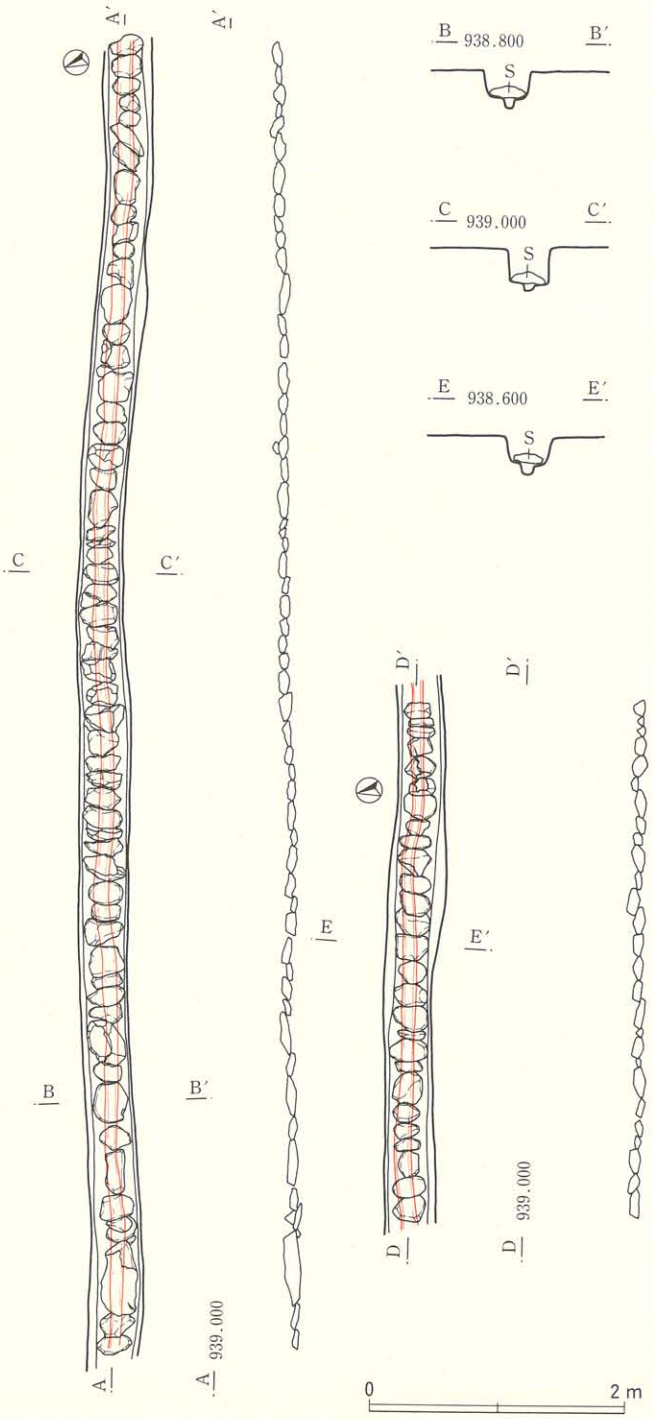
第２節　近代の遺構

１.溝　址　本遺跡は、師岡平遺跡の西側に隣接する尾根の先端に立地する。今回、遺跡の東端から先端に建立されている威力不動尊に向かう道路下を調査した結果、調査区中央に沿う形で、師岡平遺跡から尾根の先端に向かう溝が１条確認された。

第Ｉ号溝址（第15図・図版42・43）　本址は、Ｄ15～Ｆ１グリッドに位置する。威力不動尊の近辺は、道路建設の際に削平を受けており、すでに遺存していない部分がある。周辺の遺構との重複関係は、１・２号

方形柱穴列と17・25・27・31・38・46・47・48・69・90・91・92号土坑を切る状況が確認されている。本遺跡のなかで、最も新しい遺構である。溝址の規模は、上端幅35～40cm・下端幅29～33cmを測る。溝の上部が耕作で削平されているが、最も遺存状況が良い東側では62cmの深さをもっている。断面の状況は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中段付近でやや外側に開く傾向が見られる。底部に狭い逆台形状の凹みがつくられている点に特徴がある。この凹みは、上端幅９～14cm・下端幅７～10cmを測り、底部から５cmほどの深さをもっている。遺跡が立地する尾根は、東側（師岡平遺跡側）から尾根先端の西側（威力不動尊側）にかけて傾斜しているため、本址（底部）も同じ傾斜を示している。調査では、掘削後、溝の底部に比較的偏平な礫を敷き詰め、上部にロームブロックが多量混入した暗褐色土を埋めた状況が確認されている。礫は、交差するように並べてあり、隙間には小礫と粘土を詰めた状況が確認されている。したがって、礫により底部の凹みは完全に隠れ、礫上部に埋めた土が入り込まないような配慮をうかがうことができる。凹みからは、木質部は検出されず暗褐色土が埋没した状況であったが、ローム層を深く掘り込んでいる関係で、底部はかなり硬質である。出土遺物では、礫上部の層から「明治九年」銘が判読できる一銭銅貨と黒耀石の剥片が確認されており、本址を明治年間の構築物と考えることができる。本址は、師岡平遺跡（７区）でも確認されている。検出範囲からすると、現在見ることができる一本松付近から、調査区西端のＦ１グリッドまで総延長380ｍであったことが判明し、性格については凹みと礫の存在から、東側から西側にかけて流水されていた水路の可能性が高い。

本遺跡の立地する尾根の先端には、甲斐の駒ヶ岳を開山とする威力不動尊が建立されている。不動堂は、文政年間に現在の威力不動尊の道下に建立されていたものが、明治20年に現在の位置に修築され、昭和３年に火災で焼失し翌年に再建されている[2]。修築以前の不動堂を、現在の石段（登り口）付近に想定すると、本溝址を西側に延長した場所ときわめて一致し、時期的にも威力不動尊との密接な関連性が指摘できる。地元に記録（文献）がなく、推測の域を脱しないが、威力不動尊に設置された水盤に水を引く遺構であったと考えられよう。



第15図　第１号溝址（1/60）

第Ⅳ章　結　　語

威力不動尊東遺跡のある尾根状台地の先端には威力不動堂がある。威力不動堂の開基は延命行者（威力不動尊）である。『駒ヶ嶽開山威力不動尊由来記』[3]によると、延命行者は名前を小尾権三郎といい、上古田村の人で生年は寛政8年（1796）という。彼は修験道を修得し、大願をたてて甲斐国駒ヶ岳に登り開山となる。開山となったのは文化13年（1816）6月であった。その後、甲斐・武蔵・相模などから多くの信徒を得て、文政2年（1819）正月15日に遷化した。延命行者の墓は威力不動尊東遺跡と師岡平遺跡の間の道を南側に降りていったところにあるという。実際に行くと祠が数基、塚の上に立っているのがわかる。

地元の人々に話を聞くと、現在でも山梨方面に威力不動尊の信者が多くいるそうで、かなり熱心に崇敬しているという。今回の発掘で出土した溝址は、信者の人々の熱烈な信仰心から造られたものであろうか。地元にはこの溝址に関する文献は全く残っていないそうで、誰が何の目的で造ったかは知る由もない。

来跡された地元の古老の話では、子供の頃に威力不動堂に水が湧いていて、その水を飲んだことがあるとのことであった。もしかしたら、その水を引いたのがこの溝址であったのではないか。第Ⅲ章第2節にもあるとおり、溝址は師岡平遺跡内の一本松付近から引かれており、圃場整備事業が行われるまでは一本松付近から湧き水が湧いていたので、この湧き水を利用した水道であったのではないかと思われる。このような近世から近代にわたる在地の信仰の一端を物語る遺構は、信仰を考える上で非常に貴重な資料であると感じた。

古田地区における県営圃場整備事業が平成6年度から行われ、大泉山西側付近一帯の遺跡の状況がわかりつつある。特に縄文時代の落し穴は、上の平・久保御堂・師岡平のすべての遺跡で検出されており、大泉山西側は広範囲にわたって狩猟域が形成されていたことがわかった。久保御堂・師岡平遺跡と共通する落し穴であるため、同一集団による狩猟域の想定もできよう。また、威力不動尊東遺跡では、縄文時代前期末葉から中期初頭と、中期後半の集落も検出された。

以上のような遺跡の広がり方から、威力不動尊東遺跡の範囲は、威力不動堂のある遺跡の先端部にまで及ぶ可能性がある。

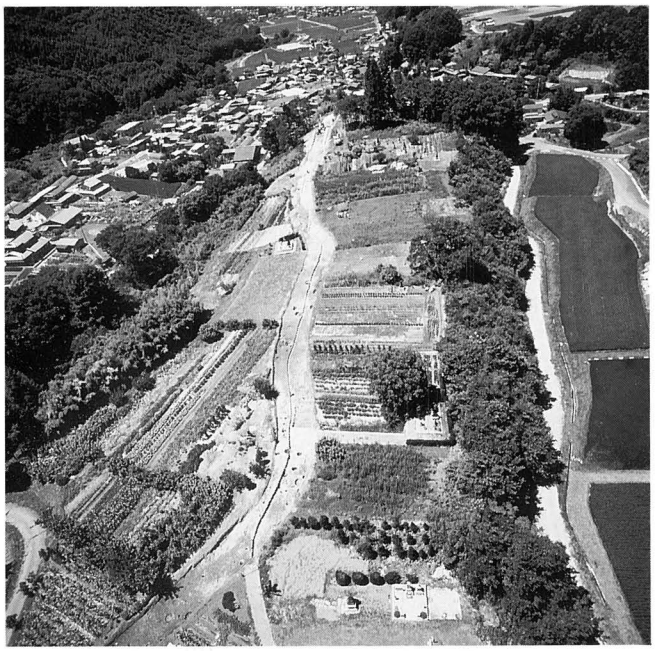
しかし、今回の発掘調査では同遺跡のほんの一部を発掘したのみである。また、この集落が師岡平遺跡7区の縄文時代前期末から中期初頭の集落の一部分にすぎず、師岡平遺跡の整理作業がほとんど進んでいないため、ここで多くを語ることはできない。課題として、師岡平遺跡の成果とともに再度考察しなければならない。

註

(1)両角昭二・北沢和男　1986「地質」『茅野市史』別巻自然　茅野市

(2)豊平村誌編纂委員会　1966「第十一章　神社仏閣」『豊平村誌』

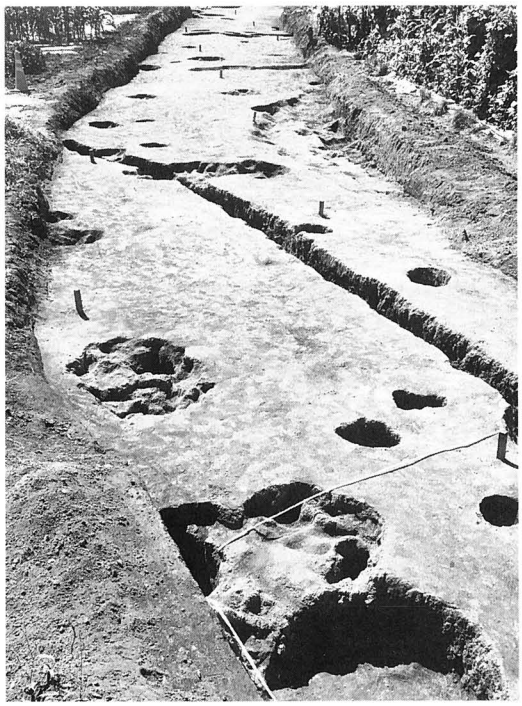
(3)上古田区蔵　（諏訪史談会『諏訪史蹟要項　二十一　茅野市豊平篇』　昭和36年6月15日　諏訪史談会／復刻　平成8年2月18日　郷土出版社）



(1)　遺跡航空写真(東より)

(2)　遺跡航空写真(南西より)

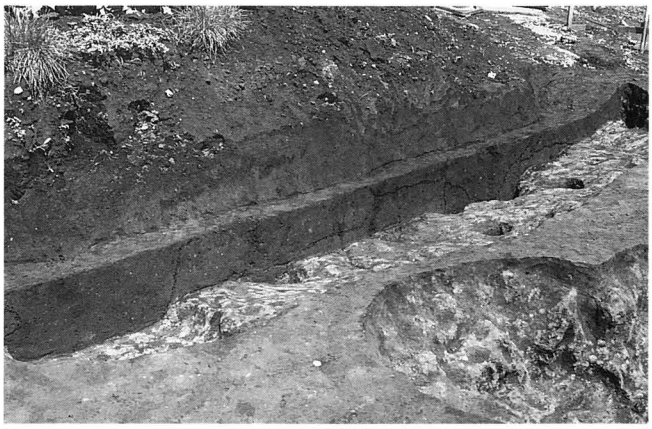
(3)　遺跡航空写真(東より)



(4)　調査区全景(第58号土坑付近、南西より)

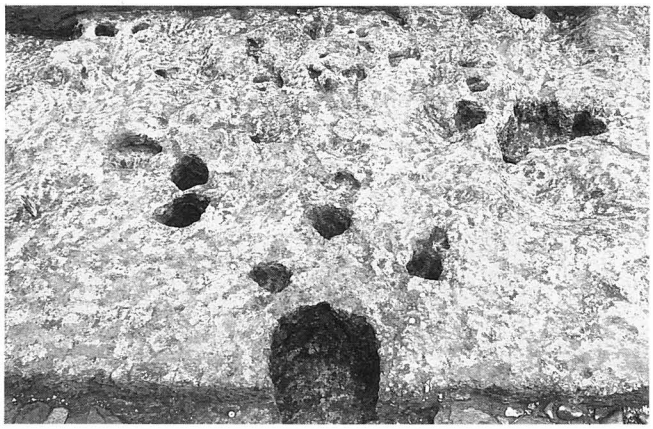
(5)　調査区全景(方形柱穴列付近、東より)

(6)　調査区全景(第38号土坑付近、南西より)



(7)　第１号住居址、第94号(左下)・95号(右後方)土坑(南西より)

(8)　第１号住居址(西より)



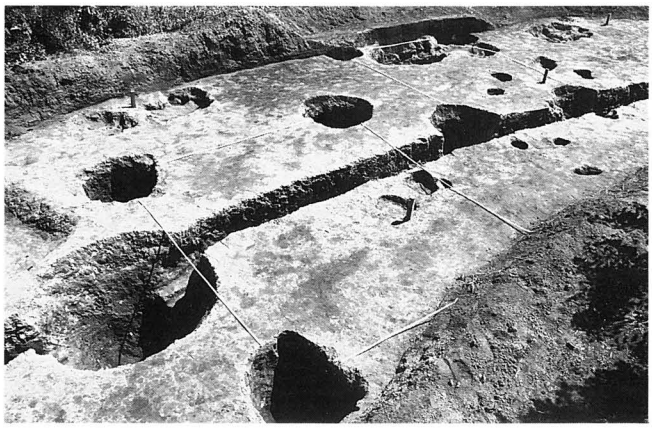
(9)　第２号住居址、第27号土坑(中央下、南より)

(10)　第２号住居址炉址(南より)

(11)　第３号住居址(中央埋甕炉、東より)

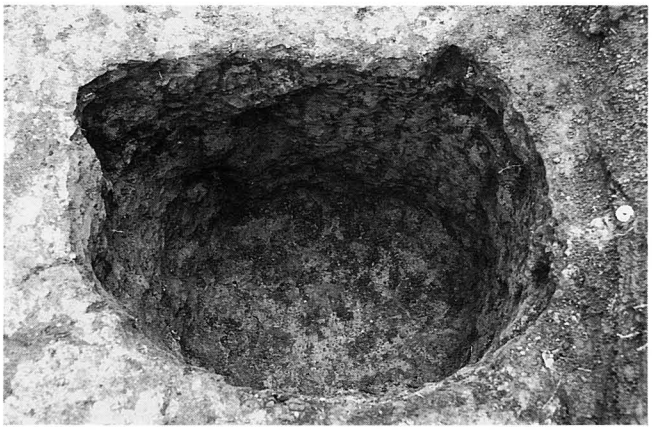
(12)　第３号住居址内出土遺物(西より)

(13)　第３号住居址埋甕炉土層堆積状況(東より)



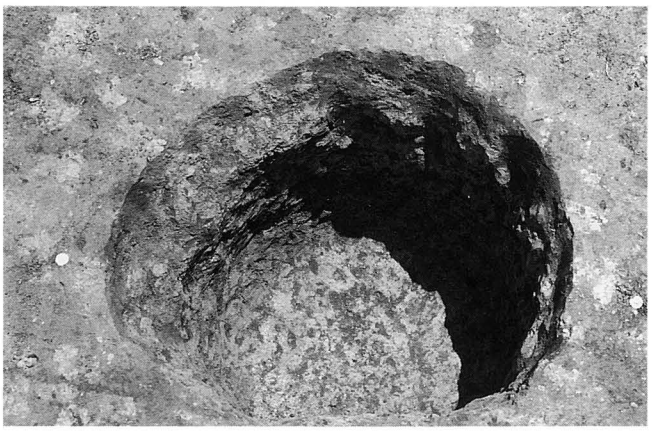
(14)　第１号(手前)・第２号方形柱穴列(南西より)

(15)　第１号方形柱穴列P_2土層堆積状況(西より)

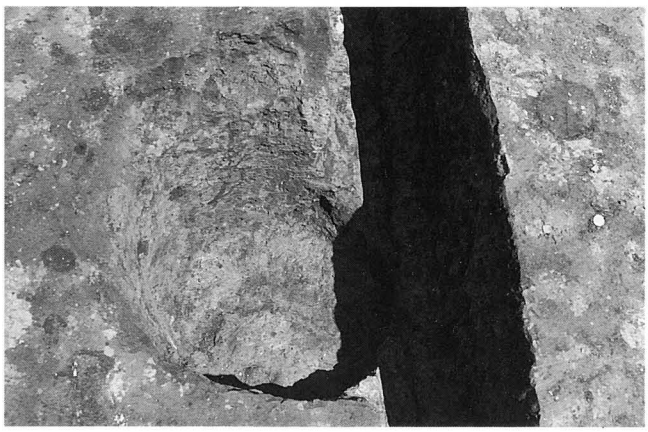


(16)　第１号方形柱穴列P_1(西より)

(17)　第１号方形柱穴列P_1土層堆積状況(西より)

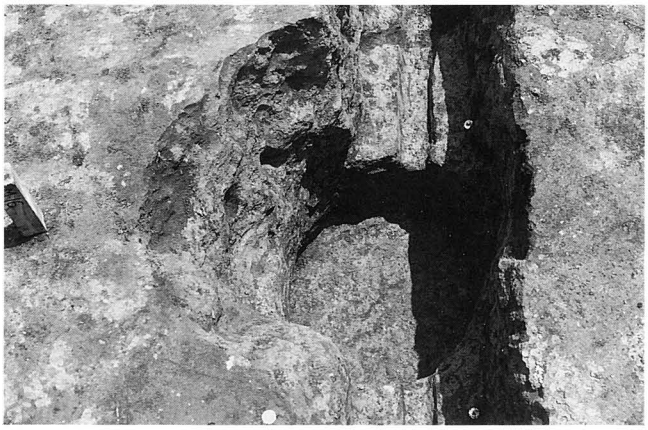


(18)　第１号方形柱穴列P_3(西より)

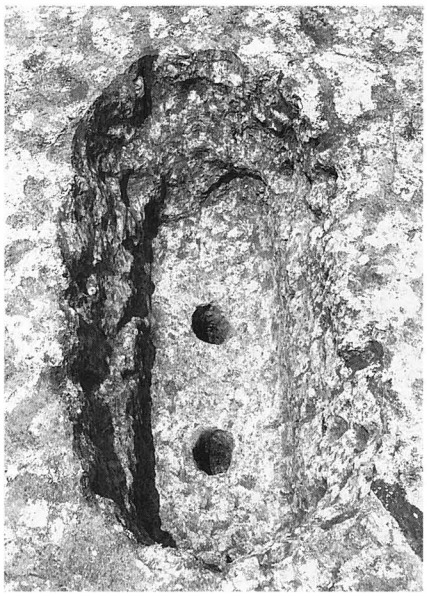


(19)　第２号方形柱穴列P_1、溝１(北西より)

(20)　第２号方形柱穴列P_3土層堆積状況(南より)



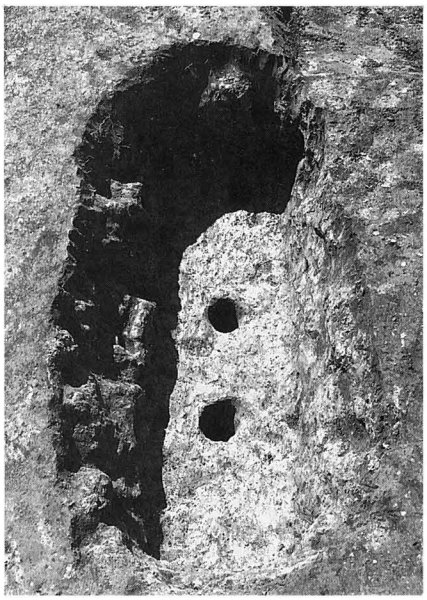
(21)　第２号方形柱穴列P_4、溝１(西より)



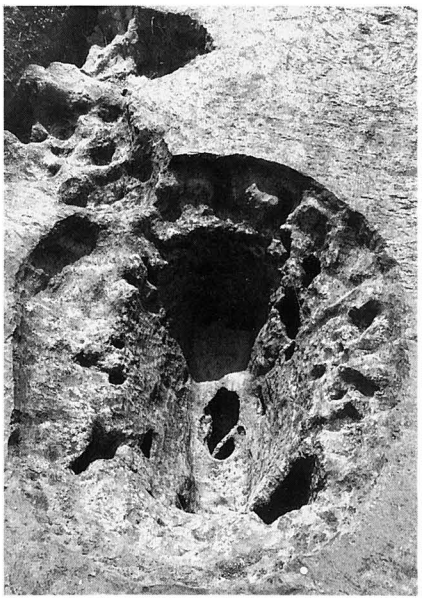
(22)　第30号土坑(東より)

(23)　第31号土坑(東より)

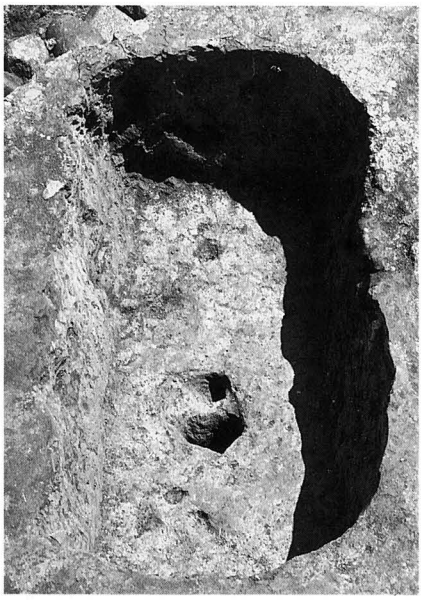
(24)　第32号土坑(東より)



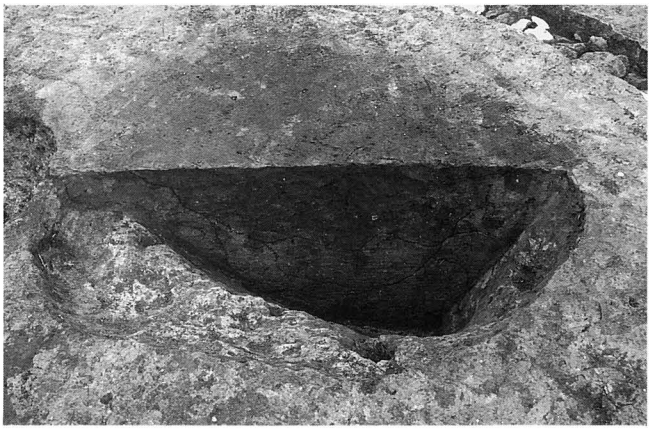
(25)　第40号土坑(東より)



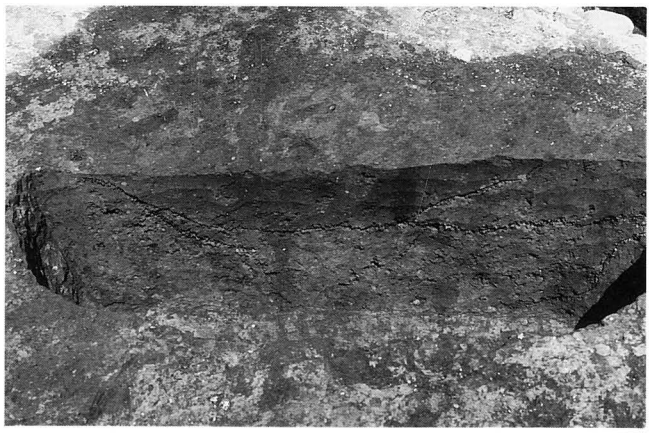
(26)　第28号土坑(東より)



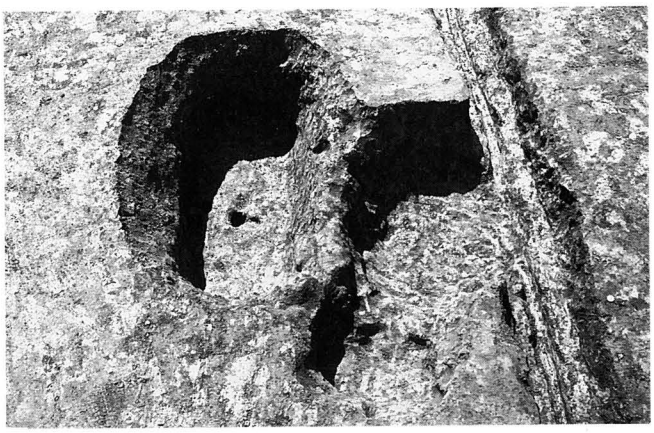
(27)　第57号土坑(南西より)



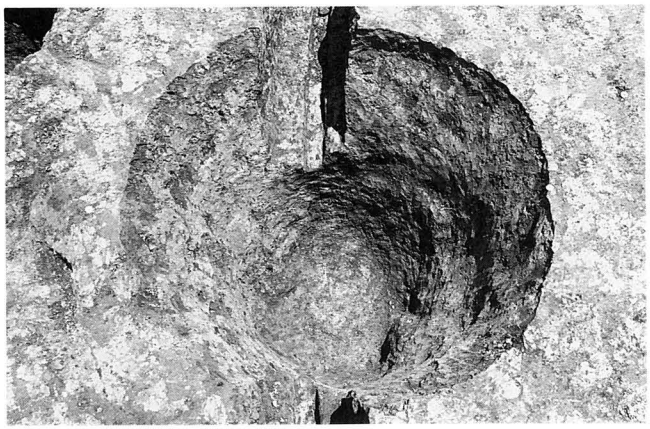
(28)　第28号土坑土層堆積状況(東より)



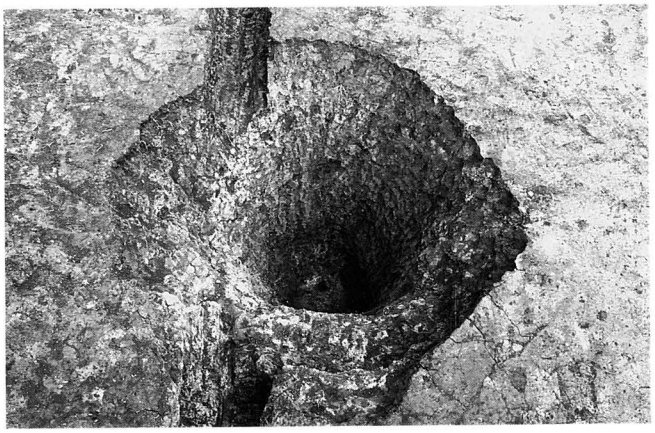
(29)　第57号土坑土層堆積状況(南東より)



(30)　第29号(左)・第48号(右下)・第70号(右上)土坑(東より)



(31)　第38号土坑(西より)



(32)　第46号土坑(西より)

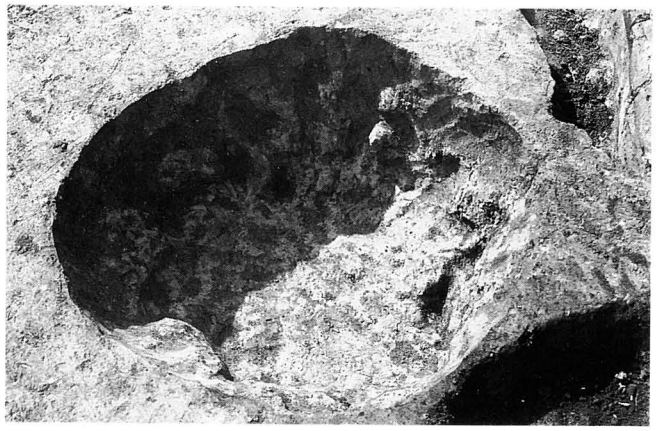
(33)　第58号(左)・第59号(右)土坑(南より)

(34)　第58号土坑(南より)

(35)　第58号土坑(焼土址1、南より)

(36)　第59号土坑出土遺物(南西より)

(37)　第1号(左)・第33号(右)土坑(南西より)



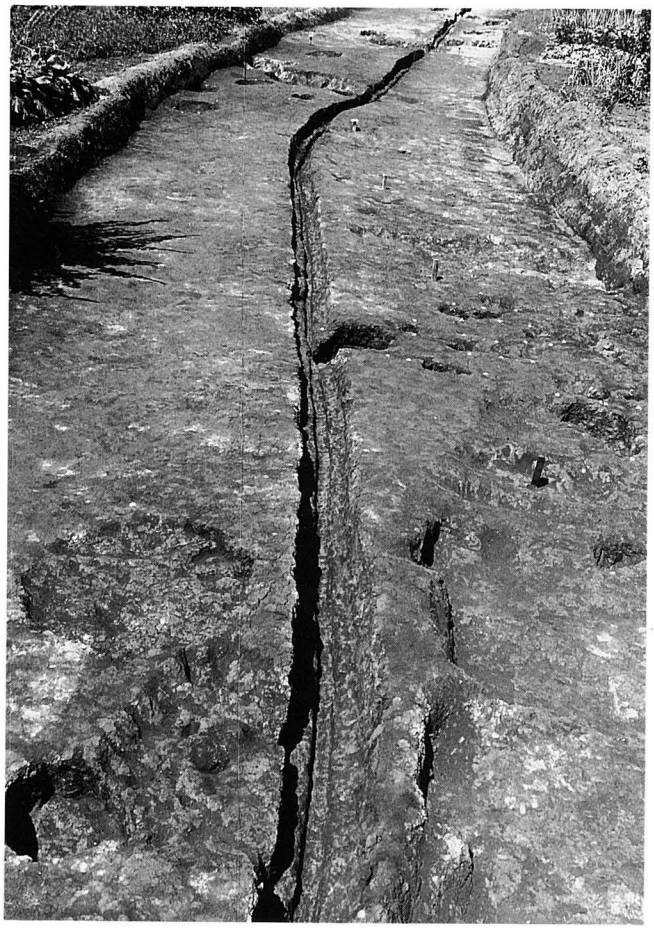
(38)　第３号土坑(南より)

(39)　第７号土坑(南より)

(40)　第８号土坑(東より)

(41)　第26号土坑(南西より)

(42)　第１号溝址(東より)



(43)　第１号溝址(東より)

報告書抄録

ふ り が な	いりきふどうそんひがし　いせき
書　　名	威力不動尊東遺跡
副　書　名	平成９年度県営圃場整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
編 著 者 名	河西克造・柳川英司
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391-8501　長野県茅野市塚原二丁目６番１号　TEL（0266）72－2101
発行年月日	西暦1998年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
威力不動尊東（いりきふどうそんひがし）	豊平（とよひら）　上古田（かみふつた）	20214	210	36° 0′ 4″	138° 12′ 14″	1997.6.12 ～ 1997.10.6	980㎡	県営圃場整備事業古田地区に伴う発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
威力不動尊東（いりきふどうそんひがし）	集落址	縄文時代 前期末葉～ 中期初頭 中期後半	縄文時代 前期末葉～ 中期初頭 竪穴住居址２軒 中期後半 竪穴住居址１軒 方形柱穴列２基 落し穴　９基 土　坑　66基 近代 溝　址　１本	縄文時代 前期末葉～ 中期初頭 土器片・石器片 中期後半 深鉢2個・土器片 石器片 近代 一銭銅貨 砥石	師岡平遺跡の縄文前期末葉から中期初頭の集落の一部

威力不動尊東遺跡

―― 平成９年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

平成10年３月10日　印刷
平成10年３月25日　発行

編　集　茅野市教育委員会
発　行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番１号
☎(0266) 72-2101㈹
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5